

布教資料 第7集

環境問題への視座

- | | |
|------------|------|
| ○ 環境問題とは何か | 酒井嘉昭 |
| ○ 環境としての自然 | 松濤誠達 |
| ○ 日本文化と自然 | 奈良博順 |
| ○ 地球環境と宗教 | 武藤義一 |



浄土宗総合研究所

布教資料 第7集

環境問題への視座

— 目 次 —

環境問題とは何か	酒井 嘉昭 (1)
環境としての自然	松 濤 誠 達 (19)
日本文化と自然	奈 良 博 順 (53)
地球環境と宗教	武 藤 義 一 (87)
あ と が き	(115)

浄土宗総合研究所

環境問題とはなにか

環境監査研究会
幹事
酒井嘉昭

環境とは

「環境」ということばは、森羅万象もろもろの空間や現象をさすたいへん幅の広い概念です。人間をとりまく空間を環境ということばで説明してみるとどうでしょう。私たちの身の回りでもっとも日常気になる

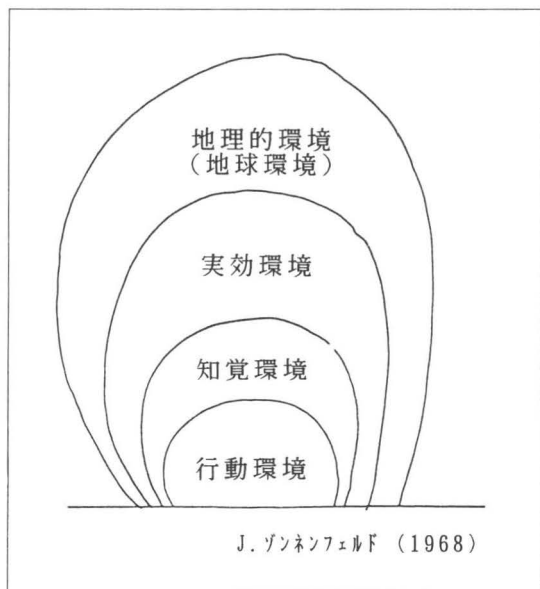


図1 人間環境のモデル

のが「生活環境」でしょう。小さいお子さんのいらしゃる方でしたら、ダニやホコリはぜんそく、アトピー性皮膚炎の大敵ということ、で日夜おそうじを一生懸命していることとおもいます。さらに「住宅環境」、「地域環境」といった具合に実に様々な環境があります。

図1をご覧ください。これは、J・ゾンネンフェルドという人が考えた人間と環境のモデルです。

人間をとりまく環境を大きく四つに分け、それぞれ行動環境、知覚環境、実効環境、地理的環境（地球環境）というふうに説明しています。

今日のおはなしの中心は、今さかんに話題になっている「地球環境」の問題に限定してそれを便宜的に生命を育てはぐくむ母胎としての「自然環境」と人間活動が盛んにおこなわれる場としての「社会環境」といった視点からおはなしをすすめていきたいと思えます。本来地球にとっては小さな存在であった人類が、今では地球にとつとんでもない存在になってしまったそのいきさつと、それに気がつき行動を起こすまでの様子を見てみましょう。

明治時代に「武蔵野」はなくなっていた

國木田独歩の小説「武蔵野」にこんな一節があります。「武蔵野もここ狭山周辺にのみ、その面影をのこすのみ……」。武蔵野の雑木林といえば、それはクヌギやコナラなど薪炭林の生産地として、またキノコやクリなどが育つ生活林でもあったわけです。しかし、この小説が書かれた明治の後半には、すでにその面積もずいぶん減っていたようです。

当時の陸軍が作成した地図をみますと現在の山手線周辺は田園地帯だったことがわかります。四谷、青山、原宿は緩やかな岡の上に茶畑がひろがるのどかな風景でした。しかし、この田園風景の広がる東京でも燃料に使う薪は自給することはできませんでした。森林は切り開かれ畑地として開墾され、その後家屋が建つといった具合にこの江戸の面影の残る東京の町も開発されていったのです。

これがおよそ百年前の日本です。広島県の宮島では明治の初期に、政府が島の森林を燃料に皆伐してしまうことを防ぐために、森林伐採を制限しました。そのため、燃料を買うための現金収入を得る手段として木工のしゃもじを作りはじめました。これが、宮島のおみやげとして有名なしゃもじとなったのだといわれています。

森林の減少

ところで、この百年まえの日本は、主要エネルギーを石炭へ転換し、産業を振興しながら自国を開発していきました。アメリカ合衆国では二〇世紀初頭までに国土の六割の原生林を耕地や牧場に代えました。フロンティアの消滅が宣言されたのは一八九〇年のことです。原始の自然が開発されてゆく様子をみかねてアメリカ最古の自然保護団体シエラクラ

ブが設立されたのは一八九二年のことです。

さて現在のブラジルでも、かつての日本やアメリカのように盛んに森林を切り開き田畑へと開墾してまゝです。国内の景気対策を第一次産業に求める場合は、開拓地を入植者に分け与えることによって解決しようとしています。また、田畑の開墾ばかりでなく、安価な木材は伐採され建築用資材などとして輸出されています。熱帯林を多く持つ国にとってそれらは、輸出の重要な商品でもあります。日曜大工でよく使用するラワン材は、マレーシアから輸入されています。私たちが薬局で買う薬のうち四分の一以上が熱帯林の植物から得たものを使用しているといわれています。抗生物質、鎮痛剤、利尿剤、下剤、鎮静剤などに利用されています。また、熱帯林は地球上のわずか六パーセントの面積しかありませんが、そこに棲む昆虫は全地球の七〇から九〇パーセントを占めるとの調査結果があります。

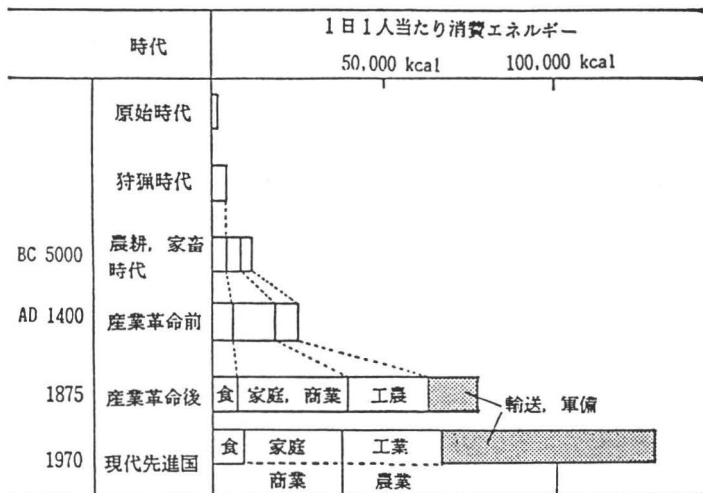
森林の減少は人類が出現して、鋤や鋤を手にし大地を耕作しだしたころにすでにじまっています。しかし、熱帯林の破壊が地球環境問題として論じられる場合、援助する先進国が相手の国への環境配慮が欠如していることがおもな原因となっています。また、森林の減少は、そこに棲む生物の量を減らしてしまう。言い換えると遺伝資源の消費を意

味しています。遺伝資源が減ることは、生物の多様性が少なくなることにもなります。

かつて中世ヨーロッパを襲ったジャガイモの黒星病による凶作は、多くを人命の奪いました。コロンブスらが中米から持ち帰ったジャガイモはヨーロッパの生活をささえる重要な作物ではありませんが、一種類のジャガイモだけを生産していました。そのため、その種類が弱い病気が蔓延すると全滅してしまうのでした。中南米のインディオたちは、畑に数種類のジャガイモを植え付けて収穫します。その中でもっとも生育したものを収穫し食料としてきました。現在私たちが食料としている作物の多くは、商業用として生産されているため限られた種類の小麦、とうもろこしなどが作付けされており、潜在的な危険、つまり、中世ヨーロッパの飢饉などと同じような大規模な凶作、疫病に対する抵抗力の弱さを持っていることとなります。

大量消費社会

図2を見てください。一人あたり一日に消費するエネルギーを食料、家庭、商業、工業、輸送にわけて示したグラフです。産業革命以前の西暦一四〇〇年ごろは、原始時代の十倍、産業革命以後は三〇倍、現在の先進国では実に九〇倍のエネルギーを消費している



(注) 人が消費するエネルギーを食料, 家庭, 農業, 商業, 工業, 輸送にかけて示したもの。西暦1400年頃は原始人の10倍, 産業革命後は30倍, 現代先進国では90倍のエネルギーを消費している。

(出所) 竹内均『エネルギーの話』(NHK ブックス)。

図2 消費エネルギーの変遷

ことがわかります。

同じ人間一人が生活するためのエネルギーは、原始時代と現代とはこれほどまでに違うのです。

原始時代の人間と現代の間では体の大きさはそれほど変わるわけではありませんから、原因は人間活動によって多くの物質がつけられ、消費することによってエネルギーの需要が増えてきたと理解できましよう。もう一度グラフを見てみますと、食料に関するエネルギーの消費は現代でも原始時代の数倍しか違いませんが、工業と商業、輸送、軍備に費やされるエネ

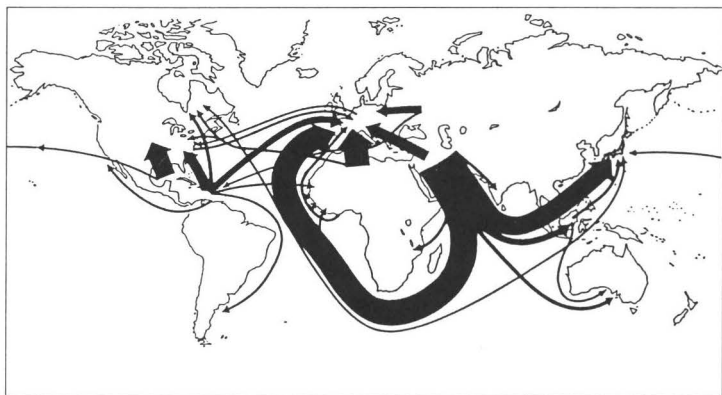


図3 石油の海上輸送（1968年）

ルギーの量は飛躍的にのびています。

身近な例ですと、ふだんわたしたちが使っている水もここ数年の間に使用量はぐっと増えています。

日本の場合、昭和四十年には一人あたりの消費量は一日一七〇リットルだったのが昭和六三年にはその約二倍の三二〇リットルまで増えています。一家族五人とすると一六〇〇リットルの水を毎日消費し、消費された水は下水となって河川を汚します。同じ現代でも、日本とネパールとを比較してみますとネパールの山村では、今でも水汲み労働は重要な女性の仕事で、一家族五人で一日に消費する水の量は約六〇リットル。日本では実にネパール山村の二七倍もの水を消費しています。

図3は一九六八年の石油の海上輸送を表したものです。中東から日本と欧州に向かって大量の石油が

移動していることがわかります。このような地球規模で組織的に大量のモノが移動するようになったのは一五世紀から一六世紀にかけての大航海時代以降のできごとです。エネルギーだけでなくモノ、そして労働力としてのヒト（奴隷）も同時に大量に、しかも組織的に移動し、消費されはじめます。これまでは、ある限られた地域のみで資源やエネルギーが循環していたものが海を渡り地球上のあらゆるところへと行き交うようになったのです。

ゴミにうまれる社会

一四世紀から一七世紀に始まった産業革命は、化石燃料を大量に消費する社会をつくりました。化石燃料を消費すると、そこからは大量の二酸化炭素が「ゴミ」として排出されます。これまで二酸化炭素は、生物活動や山火事などで排出されてはいましたが、産業革命以後は大量に定期的に組織的に石炭を消費し二酸化炭素を排出するようになりました。二酸化炭素は地球温暖化の主要な原因物質として知られています。

化石燃料の消費は、二酸化炭素の増加をもたらしましたが、それは植物の光合成によって酸素と水になってふたたび自然界へともどってゆくことができます。ところが、二〇

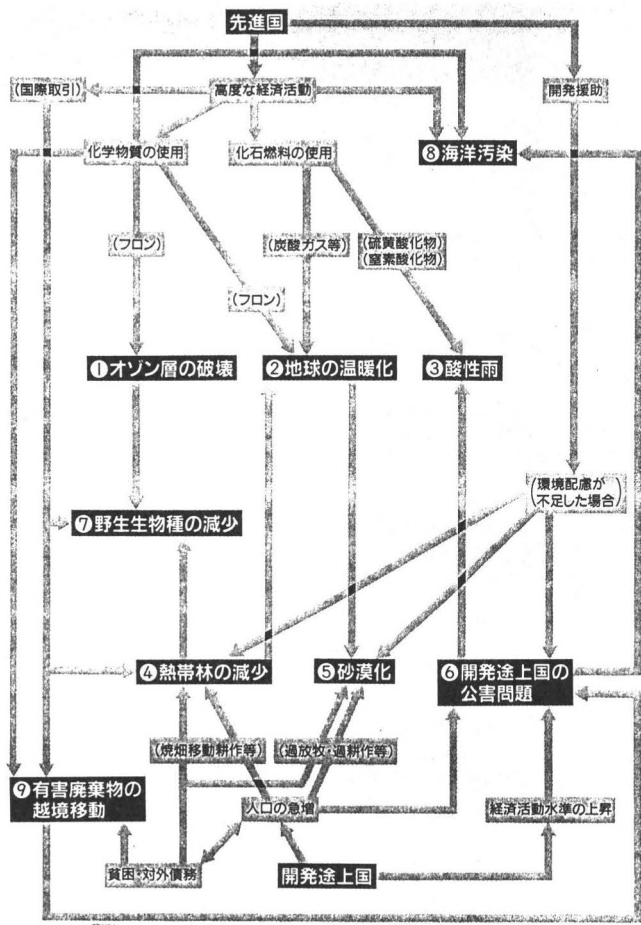
世紀になると自然界には存在しないか、あるいはほんの少ししか存在しない物質が大量に生産、利用されるようになります。原子力時代の到来です。

核燃料は当初長時間潜水することのできる潜水艦の燃料として研究されていました。当然それは軍事目的でした。これを平和利用へ転換し産業、生活用の発電に利用したのが原子力発電です。原子力発電は火力発電などにくらべ二酸化炭素の放出量は少ないのですが、発電後にでる「ゴミ」つまり核廃棄物は強力な放射性元素を含んでいるためにその処分は大きな問題となっています。放射能は遺伝子などに直接影響するため奇形やガンの原因となることが知られています。これらの放射性の核廃棄物は無毒なものになるためには気の遠くなるような年月を必要とします。つまり、自然にかえることがほとんどできない有害な「ゴミ」を大量に排出するようになってしまったのです。

ここにいたって二酸化炭素をたくさん排出する社会、自然にかえることのできない有害なゴミを大量に出す社会が誕生します。最近まで、いや現在までも資源は無尽蔵にあるもの、物質的豊かさは限りなく追求できるものといった認識が優先していました。このような認識のもと現代社会は環境破壊を加速度的にすすめながら今日まで至るのです。

地球環境問題の相互関係(図4)をご覧ください。酸性雨、地球温暖化、オゾン層の破

環境問題とはなにか



各種の地球環境問題の間には本図に掲げた以外にも複雑な因果関係が存在するが、本図では省略した。
(備考)環境庁資料による。

図4 地球環境問題の相互関係

壊、熱帯林の破壊、砂漠化、開発途上国の公害問題、野性生物種の減少、海洋汚染、有害廃棄物の越境移動などの原因は、もてる国の大量消費、持たざる国の経済成長、人口の増大、貧困、対外債務（外国にお金を借りて自国を開発しているため、借金を返済するため）に自国の天然資源を海外に輸出したり、公害を規制するより経済活動を優先させるなどの問題があります）など自然環境の問題と社会環境の問題が相互に作用し合っているのが理解できると思います。

成長の限界

これまでの楽観的な地球環境、資源への見通しを根本的に改める必要を世界的な規模で見直す機会がやってきました。もちろんこれまで多くの先見の明のある人たちが唱えてきたことではありますが、それを国際的な枠組みのなかで見直そうという機運が高まるきっかけとなる報告書が提出されます。

一九七二年に世界中の地球の問題と未来に関心がある科学者、研究者などで構成されるローマ・クラブが、世界の人口、資源、産業、食料、汚染などの相互関係をモデル化し、様々な前提条件のもと未来の地球の様子をコンピュータによって予測した結果を発表しま

した。これまで感覚的に理解されていたことが、かなり確実な問題として予測されたものですから、楽観視はできなくなっていました。

わたしたちの共通の未来

このローマ・クラブの悲観的な未来像に対し、ただ手をこまねいてばかりはいられませ

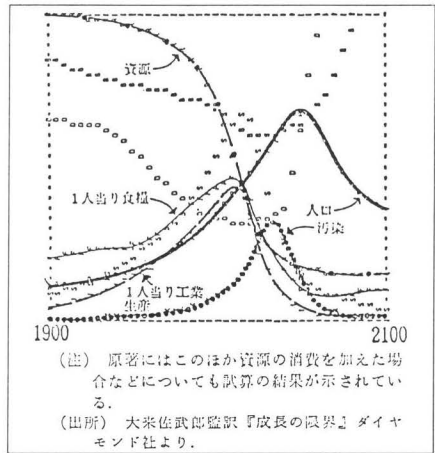


図5 成長の限界予測結果

した。図5はその結果を示したものです。一九六〇年代のように天然資源を消費してゆくと環境汚染がだんだん激しくなり、そのために人類が地球的な規模で繁栄することができなくなつて、西暦二〇〇〇年を境に人口そのものが減ることになろうと予測しています。もっともこのシナリオは一九六〇年のまま何の対策もたてず

にいた場合を想定しています。

いづれにしてもこの結論は、大きな反響を呼

びました。世紀末と終末論を唱える人も現れま

ん。一九七八年にノルウェーの首相（当時）ブルントラントさんが中心となって開かれた会議いわゆるブルントラント会議では、この成長の限界に対して政府、産業界、NGOなどが協力しあって対応して行くための基本的な理念と行動指針がまとめられ「わたしたちの共通の未来」という報告書が発表されました。この中で「未来の世代のひとたちのニーズを奪わずに、現在いきているわたしたちのニーズを満たす必要性」つまり「継続可能な発展」という考え方が示されました。

いまの私たちには、将来の人たちにきれいな水、空気、大地と資源を残し、また育てる義務があることを「持続可能な発展」ということばに託したわけです。

この持続可能な発展という考え方は、昨年開かれたブラジルでの環境と開発に関する国際会議、いわゆるブラジルサミットへと引き継がれて行きます。このブラジルサミットでは、持続可能な発展を国際政治、産業活動、市民生活の最重要課題であるということと各参加国によって確認されました。

持続可能な発展とは一体どのような発展のことをいうのでしょうか。ブルントラント委員会の報告書でいう「現在生きているわたしたちのニーズを満たす」といったことにたいしてさえ現実には問題が山積みされています。

世界の三分の一の人たちは飢えと貧困で苦しんでいます。国や地域の将来について多くの決定権をもっている政治家にとって自分に投票してもくれない未来の世代についてどれほど気を配ることができるのでしょうか。

じつは、継続的な発展をするためには現在のまだ使われていない人類の英知に期待するといったニアンスも含まれています。資源の浪費、経済格差を解決するために、また環境的に持続可能な社会を構築するためには、全ての人に公平な機会を保証し、周知を生かすことが肝要であることに気づきだしたのです。

環境問題とは

さてこれまでいろいろな話をしてまいりました。環境問題とは、一体なんでしょう。ここまで触れませんでした。タンカーの座礁による原油の流出事故や、自動車の排ガスによる大気汚染よりも深刻な環境問題が実は戦争です。湾岸戦争では、イラク軍が大量の油田を破壊し、空は黒雲で覆われました。ユーゴスラビアでは、多くの女性が民族浄化の名の下に辱められだれからも愛されることのない子供が生まれています。戦争は最も簡単に自然環境を破壊し、地域社会を崩壊させます。熱帯林の商業的破壊や、ダムによる住民移

転などとは比較にならないほどの暴力的な方法で戦争は自然環境や社会環境を破壊します。戦争は、こどもたちに大きな精神的ダメージをあたえ、その後遺症は次の世代までつづくといわれています。それは健全な社会を構築するうえで大きな障害となります。

これまで人類の歴史上いくどとなく戦争が繰り返され、都市が滅び、国家が滅びました。戦争でなくとも、家畜を放牧し過ぎて土地がやせてしまい滅びた文明や都市もありました。それは限定された地域でのできごとでしかありませんでした。そのため、つかい方を間違えた土地は捨てられ、新しい土地を求めて移動すれば当座の問題は解決しました。あるいは、他の国や地域から資源や食料を略奪することによってとりあえず問題を解決することすらできました。

しかし、今日直面している環境問題は地球そのものの危機であり、それは人類の危機でもあります。かつてSF作家たちは、核戦争によって人類が滅びないとしたらそれは宇宙からの侵略者が地球をおそってきて、人類が一致団結しその局面を乗り切ることによって、民族の争いや国家間の争いがもとでおこる最終戦争の無意味さを悟るであろうと、小説の中に書いていました。これは共通の敵を宇宙にもうけることによって、人間の利害を一致させ問題を解決させようといったものでした。皮肉なことに人類の敵は宇宙からでは

なく、自分達がこれまでおこなってきた行いが積もり積もって地球環境問題として襲ってきたのでした。問題は内なる己にあったといってよいでしょう。

環境問題ははじめて人類に課せられた内なる自己との戦いなのかもしれません。あるいは、これまで築いてきた文明を再構築するための試金石なのかもしれません。いづれにしても、地球環境問題は人類に、地球という規模で自分達のおこないを再考せざるをえない問題を提起しているのです。

環境としての自然——初期仏教の場合——

大正大学教授 松 濤 誠 達

ご存じのとおり、インドから仏教が出發したわけですが、仏教の開祖であります釈尊がインドにお生まれになりましたのは紀元前の五世紀のことでございます。今のインドの人々の祖先になる人々を、言葉の上ではインドアーリアンと申しておりますが、かれらが南ロシアの草原地帯から今のアフガニスタンを通りまして、インダス川の流域にやってきましたのは紀元前一五〇〇年のころでございます。

彼らは非常に宗教的な人々でありまして、聖典をもっておりました。その聖典のことを「ヴェーダ」と申します。この『ヴェーダ聖典』は、基本的には、彼らがその当時もっておりましたいろいろな祭祀にかかわる聖典であったわけです。そして、彼らは次第に内陸に入って東のほうに移動してまいりまして、紀元前五〇〇年のころガンジス川の流域に定着したわけでございます。このころ釈尊が、この地域に生まれるということになります。

これからお話しようとしたしておりますのは、まだ仏教が誕生する以前に、彼らが自然をどう考えていたか。その上で、釈尊が生まれて、創設された当時の仏教は、環境としての自然をどう考えていたかということを進めてまいりたいと思っております。

彼らがおりました『ヴェーダ聖典』で、一番古い聖典が『リグ・ヴェーダ』と呼ばれる最古の聖典なのです。その中でも割に新しい、第一〇巻の第一四六番目の讃歌です

が、そこに森の女神にささげる讃歌があります。それを分析すると、その当時、インドに到来したばかりの人々が一体どのように自然をみていたかというところがわかるのではないかと思います。

森の女神のことをアラニヤニーと申します。そのアラニヤニーにささげる讃歌。紀元前一五〇〇年以前の聖典でございますから、言葉もなかなか難しいのですが、まずこれをみていただきまして、それを簡単に分析してみたいと思っております。これは、森の女神であるアラニヤニーに呼びかけているわけです。

『アラニヤニーよ、アラニヤニーよ。姿を隠しているがごとくなる汝は、何ゆえに村を訪ねないのか。あたかも恐怖が「汝を見出さない」ように、「それ（村）は」汝を見いださない「であろうか」。』

『歌いつつあるコウロギにセミが伴奏するとき、車を駆りつつある人がシンバルによって「尊敬される」ように、アラニヤニーは尊敬される。』

『牛たちが「草を」食べるがごとくに、そして住まいがみられるがごとく、そしてアラニヤニーは夕暮れに、あたかも車のごとくにきしる。』

『人はまさしく牛を呼ぶ。人はまさしく木を切った。夕暮れにアラニヤーニーにおいて住みつつある人は、「何者かが」叫んだと考える。』

『アラニヤーニーは、他の者が近づかなければ危害を与えることはない。甘い果実を食して、「人は」欲するがままに「そこに」横たわる。』

『香油のかおりのごとき芳香をもち、耕作を行わず「とも」多くの食物を有する、野獣たちの母であるアラニヤーニーを、私は「今まさに」ほめたたえた。』

（『リグ・ベータ』 10・146・1―6）

ほぼ、こういう内容の讃歌であります。それを分析いたしますと、次のようにいえるのではないかと思います。

- 1 森の女神アラニヤーニーは、その姿を他人の前にあらわさない神である。
- 2 森は村と対照をなす両極を考えられる。
- 3 森ではコウロギやセミなどの鳴き声がする。
- 4 森では夕暮れどきに、あたかも車がきしめるような音や、何者かの叫ぶ声が聞こえることがある。

5 森は、人がみだりに接近しなければ危害を与えない——ということは、逆にいいますと、不用意に接近すると危険である。

6 森は甘い果実を備え、食物は豊かであり、芳香をただよわせる——一言で申しますと、豊穰力に富んでいるということになろうかと思えます。

7 森には野獣が住む。

大体こういう内容のことが書かれていると思えます。これをもっと簡潔に申し上げますと、次のようにいうことができますと思えます。

森は人が住んでいる村とは対照的であって、むしろその村の周辺の場所である。森は豊穰力に富んでいて、人間の生活に益を与えることが大であるけれども、それにもかかわらず、うかつに近づきますと人間に危害を与える。

森には昆虫や野獣などの多くの生物が住んで、豊かな非常ににぎやかな喧騒の場であるけれども、半面、得体の知れない騒音が聞こえる無気味な場所でもある。

森のもつ特殊性は、森の女神であるアラニヤニーの、尊敬されつつも得体の知れない、そういう性格にそのまま投影されているということができると思えます。要するに、森は人を利するものである半面、危険に満ちていて、人に脅威を与える場所でもあるとい

うことが、これだけ短い讃歌の中に込められているのではないかと思えます。

このように古代のインドの人々は、人間の広い意味での技術がまだに加えられていないという意味での自然、この場合、今申し上げました森と言及されているわけですから、それが非常にアンビヴァレントな両義的なものである——益すると同時に危険である——そういう両義的なものとして理解していたということを、我々は、この歌の中から知ることができると思えます。

森という一つの現実の存在が、一柱の女神としてみなされておりました、その讃歌の対象とされている理由の一つも、こういった人手のかかっていない自然のもつアンビヴァレント、両義的な性質にあると考えることができると思えます。人間の生活に利益を与えて、それを助ける。そして、人間の生活を繁栄に導く、人間に利する、利益を与えるという意味での自然の側面というのは、当然のことながら歓迎すべきものではありませんけれども、自然が人間に対して、常にこういった側面だけを開示するといえますか、示しているのであるならば、自然というのは、人間にとって何らかの問題を提起することはないわけです。

ところが、人間にとって自然が非常に重大な問題となりますのは、自然が人間に対して

菌をむき出して、人間の生活に害を与える場合、言葉をかえますと、人間生活に脅威を与える自然の側面が、人間にとって大変大きな問題を提起することになります。簡単に考えますと、自然の脅威といえますと、地震ですとか暴風雨ですとか豪雨に始まり、いわゆる自然現象がありますでしょうし、害虫や野獣などによって与えられる危害といったものも、自然が人間に与える脅威と考えることができますと思います。

さらに深く考えますと、私たち人間の個体の内面においても、言葉をかえますと、苦痛ですとか病気、精神的な苦悩といったようなものも、我々の個体の内なる自然と考えることができるのではないのでしょうか。人間の個体が自然の一部であるという意味において、自然のもたらす脅威の一つとして、こういった我々の感じる苦痛ですとか病気ですとか精神的な悩みも理解することができないのではないかと考えます。人間の個体の現実の上でも、人間の個体が存在意義を失うという意味での死も、自然によって与えられる脅威以外の何者でもないと考えることができると思います。

自然が人間の生活にとって脅威を与える側面をあらわに示しますとき、人間にとって成し得ることは一体何かということを考えてみますと、その自然に甘んじて身を任せる、あがままに自然のうちに生きるという方法が一つであろうかと思えます。もう一つの方法

は、その脅威に立ち向かって、これを克服するということでありましょう。この二つのうちのいずれかを選択する以外、人間にとって自然と調和できる方法はないはずです。

今お話しいたしましたように、紀元前一五〇〇年のころインド亜大陸にやってまいりました、みずからアーリアと称した人々が、到来する以前からもっていた、ヴェーダの祭祀が記すところの祭祀の目的というのは、我々の生活に脅威を与える自然に果敢に挑戦して、それを克服して、人間生活に適合させていこうと、それを目的とするものであったわけです。簡単に延べますと、ヴェーダの祭祀というのは、死に代表される自然を祭祀の上でいかに克服し、よりよい生を獲得しようかという一つのメカニズムであったということができると思います。

しかし、ヴェーダの祭祀の一つのシステムは、決して人間が作り上げたものではありません。むしろ神の命令に基づいて作り上げられたものと理解されております。その意味では、ヴェーダの祭祀といえども、神という、自然の内に含まれる性質のものであるということができます。

ヴェーダのお祭りというのは祭祀の専門家がおりまして、その人々を日本の学者が「バラモン」と称しているのであります。バラモン以外の人々は、この祭祀を実際に行うこと

はできません。バラモンは、人々のために祭祀をみずからが実行することによって生きていた人々でもあったわけです。

ヴェーダのお祭りの専門家であったバラモンは、この祭りの頂点に位置していた人々であったわけですが、そのヴェーダ祭祀は、自然を人間の生活に適合するように変革するというメカニズムであるという理解の辺から考えますと、ヴェーダの祭祀自体は、文明としての体系をもっているものとしてみる事ができます。祭祀の専門家であるバラモンは、文明の所有者であり、常にその頂点に立つ権威者であったとみることができるとは、必ずしも正しいとは限りません。

次に、先ほどお話ししましたように、紀元前五〇〇年のころになりますと、彼らはガンジス川の流域に移住してきました。祭祀を実行することになるわけです。実は、この地域は上流から大変豊かな土を流してまいりまして、ガンジス川の流域は地味が大変豊かなところでありました。この豊かな土地は、農耕生活に大変適しておりました。畑を耕しますと農作物が大変よくとれる。そして、余剰の農作物を中心にして、この地域で物々交換、いわゆる商業取引が盛んに行われるようになります。そうすると、その商品をあつかう多くの商人が出てまいります。その商人たちは、地理的に便利なところにマーケットを

つくりまして、この流域に商業都市が成立してくるわけです。

ということは、当然、この地域の農耕生活が盛んになりまして、人々はここに定住することになります。農業を営むということは、定住しませんと不可能であります。そうすると、地味が豊かですから、商品としての作物がたくさんとれる。それをもとにして、いろいろ商業活動が盛んになるということ、現在でも残っております有名な都市の中にはこのころに成立したものもあります。例えば、ベナーレスですとか、後にアショークが築きましたマウリヤ王朝の首都でありましたパータリプトラ、これは、今、パटनाといわれているのですけれども、そういった多くの都市が出てまいります。

その商業都市では、当時の人々の生活からすれば、かなり豊かな生活が行われていたわけですが、その時期に、この地域に一群の出家修行者がいたのです。彼らは「サマナ」とか「シユラマナ」と呼ばれた人々です。この「サマナ」という言葉を漢字で写したのが「沙門」であり、この人たちの一人が仏教の開祖である釈尊であったわけです。

この人たちは、大体共通の考えをしておりました。その共通の考え方は、人間にはあくことを知らぬ妄執がある。この妄執はなぜ起るのかというと、我々に生きるという本能があるからである。我々の生活ですと、おながが減っているときに、ふかふかのゆげの出る

ようなおまんじゅうがあった。そうすると、我々は、ぜひそれを食べたくなるわけです。その限りでは苦しみではないのですけれども、それがとれないとなりますと、我々は、何とかしてとろうと煩悶するわけです。そうすると、そこで、何とかしてとりたいと悩むわけです。それは、ふかふかのおまんじゅうならおまんじゅうに對するあくことを知らぬ執着が起こるからです。このような気持ちが起こりますから、当然我々に苦しみが起こってくると彼らは考えたわけです。

したがって、人間存在というのは常に苦しみであって、この苦しみの存在から逃れる、この苦の生活をやめるためにはどうしたらいいかといいますと、この妄執を絶てばいいということになります。我々は肉体をもっていて、本能に基づいて妄執が起こるわけですから、肉体の力を弱めてしまえばいいわけです。ということ、苦行を行います。そして、肉体の力を弱め、妄執を断じるわけですが、家庭生活は妄執の根源です。子供がいれば、子供というのは、我々にとって常にとらわれの対象になります。家族は皆そうです。妄執を捨てるためには、家庭生活を捨てなければならぬと考えるわけです。そこで、出家をするわけです。

彼らの住む場所といいますと、木の根元ですとかジャングルの中、洞穴の中、場合によ

りますと墓地に住みます。インドには墓地はないではないかとおっしゃるかと思いますが、墓地と申しましても死体を遺棄する場所、死んだ方の遺体をもって行って、そのまま放置して風葬にする場所です。それは、特定の住所をもちますと、その住所に対する妄執が起こるからです。しかも、あいつはあんないいところに住んでいるのに、おれはこんなところにしか住めないとか、必ず住む場所にこだわりの心が起こります。

それから、彼らは、死者が包まれていた布ですか死体が着ていた着物ですとか、汚いものをめぐって捨ててしまった布を拾ってまいりまして、それを洗い清めて身にまとう。その着物のことをカシャーヤと申します。これを漢字で写したのが袈裟です。ですから、袈裟は何ともいえない、名伏のつかない色をしていた。それから、「糞掃衣」と申しますけれども、ふんのような汚ないものをぬぐった布が捨てられておりますと、それを拾ってきて、洗い清めて、洗いつづけて、それを身にまもっていたわけです。場合によりますと、一糸まとわぬ素っ裸で生活をしている人もおりました。あるいは、人間の髪の毛でつくったものを身にまもっていた人もいたようです。

それはいろいろあるわけですが、なぜ、そういう格好をしていたかといいますと、着物を着ますと、着物に執着が起こるわけです。あいつはあんないいものを着ているのに、お

れはこんなものしか着られないということ、妄執を絶つためにそういう生活をしていたわけです。

彼らは、思想の上でも、一つの基本的な考え方がありました。こういう妄執を絶ち切りますと、そのとき人間は精神的な大展開を得ることができる。そのとき、人間は苦の存在を脱却することができると考えていたわけです。この考え方は、初期の仏教と全く変わることはありません。

釈尊が苦行を捨てたということというのが我々の常識ですけれども、私はそうは考えていないのです。文献でみる限り、釈尊は、むしろ苦行を奨励していたところがあります。事実、釈尊は苦行を実行したわけですから、あの苦行を捨てるという意味では、私が文献の上から理解するところによりますと、我々が今まで常識で考えているのと違うのではないかと思えます。沙門たちはそういう生活をしていたわけです。その中の一人が釈尊であったわけです。初期の仏教の修行者の考え方も、これと変わるところはほとんどないと思っております。

ここでは、初期の仏教の出家修行者たちを、その当時の人々が客観的にどうみていたかということをお話ししたいと考えております。それは、環境としての自然を、その当時の

人々がどうみていたかということの解決の一つの糸口になると思っています。

ここに書きました『ヴェーダ聖典』というのは大変膨大なものですけれども、その当時のシャモンたちのことについて全く触れていません。初期の仏教の文献と思われる文献は、この『ヴェーダ聖典』のこと、特にヴェーダの祭祀についてほとんど知らないのです。ですから、文献でみる限り、この『ヴェーダ聖典』の系統の人々と、仏教の、もっといいますと沙門の系統の人々とは全く違ったグループの人々であると考えざるを得ないわけです。

この文献は、仏教の出家修行者についてほとんど触れておりませんから、これを使って、その当時の仏教の出家修行者がどういう生活をしていたかということを知ることはできないわけです。ですから、とりあえず、この仏教の文献を材料に試みていく以外に方法がないわけです。ところが、仏教の文献も自分たちの内部のことです。逆の言い方をしますと、仏教徒が仏教徒をみるわけですから、それなりに色のついた見方でみているわけです。したがって、そのような部分をどうやって取り除いていくかということを考えまさんと、客観的に、その当時の仏教の修行者が、周囲の人々からどうみられていたかということを正確な形で出すことができないわけです。そういう意味で、資料の検討に

大変苦慮するわけです。

ここで、その当時の釈尊をバラモンがどうみていたかということを端的に物語っていると思われるものとして、仏教の文献の中で最も古いものの一つとされており、『スッタニパータ』と呼ばれる文献を見えます。

私は次のように聞いている。「すなわち」あるとき尊師（釈尊）は、サーヴァッティイこれは舍衛国のジェータ（王子）の森にあるアナータピンディカの庭園（いわゆる祇園精舎のことです）にとどまっておられた。このとき、尊師は午前中に內衣をつけ、鉢と重衣とをもって乞食のためにサーヴァッティイに入った。

ちょうどこのとき、バラモンであるアツギガ・バーラドヴァージャの住居において〔祭祀〕の火が燃え上がり、〔祭祀〕の供物が〔祭火に献供するべく、祭祀用の杓に〕（これは柄杓のような道具を使いますけれども、火の中に注ぎます）とられていた。

このとき尊師は、サーヴァッティイにおいて托鉢して、バラモンであるアツギガ・バーラドヴァージャの住居のあるところに近づかれた。バラモンであるアツギガ・バーラドヴァージャは、尊師がずっと遠方からやって来られるのをみつけた。みつけると、尊師に

このことをいった。

ムンダカよ（これは意味の上では、頭を剃髪した者よという意味です。ただし、それは「ムンダ」という言葉なのですが、「カ」がつきますと軽蔑の意味になります。この「カ」は軽蔑のためにつけた接尾語です）その同じ場所にじっとしている。サマナカよ（これはシャモンのことです。それに「カ」がつきますと軽蔑の意味で使われます）その場所に「じっとしている」。ヴァサラカよ（実は、これがキーワードなのですが、これは後ほど説明いたします）その同じ場所に「じっと立っている」。

このようにいわれると、尊師はバラモンであるアツギガ・バーラドヴァージャにこのことをいわれた。

それならばバラモンよ、おまえは、あるいはヴァサラ、あるいは人をヴァサラたらしめる要素を知っているのかと（「ヴァサラ」という言葉の意味を知った上で私に呼びかけているのかということをいうわけです。そうすると、バラモンのアツギガ・バーラドヴァージャは）貴下ゴータマよ、私は、あるいはヴァサラをも、あるいは「人を」ヴァサラたらしめる要素も知りません。私が、あるいはヴァサラを、あるいは「人を」ヴァサラたらしめる要素を知ることができるよう、貴下ゴータマは、私に「その」理法を適切に示して

くださいと（逆に、お釈迦様に、ヴァサラというのは一体どういう意味なのか教えてください）。
さいというわけです。

『スッタニパータ』 1-7

たったこれだけのことでありますけれども、この後に釈尊がヴァサラとは、こういう人をヴァサラというのだということをとくさん述べ聞かせるわけです。

実は、これだけの文章が、当時の人々が仏教の出家修行者をどうみていたかということを知りかぎを与えてくれていると思います。この部分に関する註釈文献がございまして、そのところを私が翻訳したのが『パラマッタ・ジョーティカー』という註釈文献ですが、この註釈文献は紀元後の五〇〇年のころに書かれたものです。ですから、釈尊の時代からみますと、もう一〇〇〇年も隔てております。それでも一番古い註釈なのです。

こういう註釈文献がなぜ書かれたかと申しますと、もうこのころに教典の本来の意味が次第にわからなくなってきたからです。わからなくなったからこそ註釈を書く必要があったのです。

『このとき、すべてのすぐれた様相を備え、あまねく魅力的である尊者をみて、なぜバラモンの心は喜ばなかったのであろうか。そして、荒々しい言葉によって、なぜ「彼は」このように尊者に話しかけたのであろうかと考えて、「次のように」いわれるのである。

このバラモンは、「縁起のよい「祭祀を」実践しているときに、サマナをみることは凶兆である」という、このような見解を抱いていたといわれている。それだから、「偉大な神様が「献供の品」を食するときに、不幸の兆しである剃髪したサマナの奴が、私の住まいに近づいてくる」と考えて、心を喜ばさなかった。それどころか、怒りの支配するところとなった。このとき、「彼は」怒り、不満で、「ムンダカよ、その同じ場所に「じっとしている」云々と、不満の言葉を発した。

そして、その言葉の中においても、「剃髪した者は不浄となる」という見解がバラモンたちの間にあるので、「この男は不浄である。したがって、神々やバラモンたちを尊敬する者とはならないであろう」と考えて、蔑みつつ、「ムンダカよ」といったのである。

「ムンダカを性質とする者は不浄であるから、この男がこの場所にやってくるべきではない」と「いう意味である。」そして、「彼は」サマナとなっても肉体の不浄を説明することがない」と考えてサマナの状態を蔑みつつ、「サマナカよ」といったのであって、単に

怒りにまかせただけで「サマナカといったのでは」ない。「彼は」"ヴァサラなる者たちを出家させて、彼らと一緒に、共に食事をさせたり共に楽しませたりすることによって喜んでいるのであるから、この男はヴァサラよりも一層邪悪であると蔑みつつ、"ヴァサラカよ"といったのである。また、"ヴァサラの生まれである者たちが献供を目撃したりマントラ「を唱えるのを」聞くと、そのために悪が生じるであろう"と考えながら、このようにいったのである。

(『パラマッタ・ジョーティカー』Ⅱ，VOL 1、P.175)

- このように説明がしてあります。この説明をもう少し簡単に分析いたしますと、
1. バラモンが祭祀を執行しているときに沙門をみることは不吉である。
 2. バラモンにとって、剃髪した者は不浄であると理解された。
 3. 「ムンダカ」という言葉も「侮蔑」の意味を伴った語である。
 4. 「サマナカ」という言葉も同様に「侮蔑」の意味をもった語であると考えられる。
 5. 「ヴァサラカ」という言葉も「侮蔑」の意味合いをもつ。しかも「ヴァサラよりも一層悪い」という、マイナスの要因が強化された語である。

6. 「ヴァサラ」に生まれた者たちが、バラモンの祭祀上の行為を見聞すると、よからぬ結果が生じる。

これだけのことがこの中に込められていることは確かだと思えます。

実際そのとおりでありまして、チャンダーラ（旃陀羅）と申しまして、バラモンの中心世界の枠組みの外に置かれた人々と沙門たち、それから犬、獣等が、バラモンの執行しておられますヴェーダの祭祀を目撃しますと、このヴェーダの祭祀は効力を失ってしまうと考えられていたわけです。ですから、バラモンにとりましては、釈尊などが近づいてくるのは非常に困ったことだったわけです。

これは、ジャイナ教の出家修行者の場合もそうです。ジャイナ教の出家修行者がバラモンが祭祀をしているところにやってきましたと、袋だたきに遭ったりしたという記録が残っております。沙門と呼ばれる人々がここへ来るのは、バラモンにとっては大変危険であったわけです。その辺が注意すべきところだと思います。

そこで、今のことを踏まえまして、さらに話を進めてまいりますと、今まさにバラモンがいったという「ムンダカ」。この「ムンダ」という言葉は、先ほど申しましたように、「頭をそった」という意味の言葉です。これは、もともとは、木の先端に枝葉がないと

か、動物などが角を失ったという意味で使ったものでした、軽蔑の意味を含まない言葉であったのですけれども、この場合は、明らかに軽蔑の意味で使われている。実際、頭の毛をそってしまいますと、バラモンの世界ではこういう文章がございませう。「うそを証言すると裸となって髪の毛を失って、飢えと、のどの乾きにさいなまれる」ということで、偽証をすると、裸となったり頭髮を失ってしまうぞという言葉があるように、どちらかという、後に侮蔑の意味を含めた言葉として使われるものなのです。

「サマナ」というのは、先ほど申しましたようにシャモンのことでありまして、決して悪い意味をもったものではないのですけれども、それに「カ」がつきまして「サマナカ」という言葉になりますと、軽蔑の意味を含むようになります。

それはともかくといたしまして、「ヴァサラ」という言葉は、一体どういう意味であったのかということをお話しすると、当時の一つの自然観がおわかりいただけるのではないかと思うのです。

バラモンの社会では、バラモンの男の子が七年目になりますと、一つの儀礼を行います。これは入門式と呼んでいい儀礼なのですけれども、それをウパナヤナと申します。これはどういう儀礼かごく簡単に申し上げますと、バラモンの少年は、先生のところに連れ

てこられるわけです。そのとき、黒いカモシカの皮を身にまといまして、腰には、草でつくりました三重のベルトを身につけます。そして、これを身につける儀礼がウパナヤナと呼ばれる儀礼なのです。カモシカの皮は、胎児を包む羊膜であると言われ、この三重のベルトは胎児の臍帯であるとされます。つまり、この儀礼が、その少年をもう一度胎児の状態に戻してしまうという儀礼であります。そして、その後、先生から『ヴェーダ聖典』を教えてもらうわけです。その間、非常に厳しい戒律を守りまして生活をします。

この勉強の時期が終わりますと、「サマーヴァルタナ」という儀礼をいたします。このときは沐浴をするのです。その中でカモシカの毛皮と三重のベルトを水の中にぬいで、そのまま出てきます。このサマーヴァルタナという儀礼は、まさしく誕生の儀礼でありまして、その少年は、ここで一人前の人間としてもう一度生まれ直すと考えられております。ですから、バラモンのことを「ドヴィジャ」——これは二度生まれるものという意味です——と呼びます。一回は母親の体から生まれ、もう一回は、この儀礼によって生まれる。それで、バラモンのことを「ドヴィジャ」と申します。鳥もドヴィジャと呼ばれます。これは、一回は卵として生まれ、もう一回は卵から鳥として生まれますので、二度生まれるものというので鳥のこともドヴィジャと呼ばれます。

ところで、何歳のときにこの儀礼を行うかというのは決められているわけです。

七年目にバラモンの少年にウパナヤナを執行すべきである。その少年のブラフマンの威力を望む者は、五年目にウパナヤナを執行すべきである。しかし、その少年の長寿を望む者は、九年目にウパナヤナを執行すべきである。十一年目にクシャトリヤの少年に、十二年目にヴァイシヤの少年にウパナヤナを執行すべきである。十六年を超えた少年にウパナヤナを執行してはならない。なぜならば、彼は睾丸を失うので、ヴリシヤラとなってしまうからであるといわれているからである。

『ジャイミニヤ・グリヒヤストトラ』 1、12..10、4-6

その当時の人は、十六年を超えますと、もう男性としての機能を失ってしまうと考えていたわけです。その男性の機能を失ってしまった人々をヴリシヤラと呼んだわけです。十六歳を超えてしまってヴリシヤラとなってしまう人々は、もう一度復帰することが可能なのです。それは、一つの儀礼を行う必要がある。それは、ヴラーティヤ・ストーマという祭祀を行いますと、彼は、もう一度もとに戻りまして、さっきのウパナヤナを受ける

資格を得ます。ということは、ヴリシヤラと呼ばれる人は、まだ男性機能を失ったという意味合いだけであって、儀礼の上でもう一度正当な男性に戻ることができることを意味していることにほかならないわけです。

そこで、釈尊は、先の文献でヴァサラカと呼ばれる。この「ヴァサラ」というのはパーリ語でございまして、サンスクリット語では「ヴリシヤラ」です。ヴリシヤラというのは、今お話しましたように、十六歳を超えてしまって、男性機能を失ってしまった少年のこと。それと同じ言葉がパーリ語ではヴァサラでして、さっき申しましたお釈迦さんがヴァサラカと呼ばれたのです。それは、ヴァサラよりもさらに悪いという意味だということとを説明いたしました。

つまり、ヴリシヤラよりもさらに悪いということなのですが、それはどういう意味なのかと申しますと、「復帰が不可能」という意味です。もうバラモンの社会に復帰することは不可能なほど邪悪であるという意味であるわけです。ですから、バラモンの祭祀には一切復帰できない人ということですよ。

どういう人たちが復帰できないかと申しますと、さっき申しました。シャモンと呼ばれる人々とチャンダーラ（旃陀羅）と呼ばれる人々たちが、ヴェーダの祭祀にとって危険な

人であったと同様に、二度とヴェーダの祭祀に復帰することができない人々たちであるということができるわけです。

ここで、これをまとめてお話ししてみたいと思います。一番最初に申し上げたいのは、『ヴェーダ聖典』を含めまして、最初期の仏教文献の中では、現在、我々がいう「環境汚染」という意味の事柄、人間がみずからの利益のためにつくり出したもの、ないしはその手段や副産物によって、彼らを取り巻く環境が人間生活にとって不都合な状況をもたらされるという意味での環境汚染という問題認識は一切存在しないということは、私の調べた限りでははっきりいえると思います。

バラモンの祭祀と申しますのは、その自然を克服するメカニズムでありまして、その自然を克服して、自分たちの都合のいいようにするメカニズムとしての祭祀をバラモンが独占していたわけです。そのバラモンは、その限りにおいて、みずから文明を代表するものとみなしていましたし、実際、そのようにみられていたと思われまます。

ただし、このバラモン中心の文明には、その中に安住するための一つの嚴重な規範があった。この規範をダルマと呼びます。そのバラモンたちは、このバラモン中心の文明の中に生活する以上、当然このダルマの遵守が要求されました。したがって、ダルマはバラ

モンを中心とした人々の生活を規制してきたわけです。つまり、それを記したものが法典であつたわけです。バラモンたちは、この法典に規定されたことを守ることによって、バラモン中心の社会の規範を守り、文明を代表することを続けてきたということがいえると思います。

ダルマから逸脱したものは文明に浴することができない。当然、文明の外と申しませうか、外側に置かれることになります。文明の外ということは、どういうことを意味したらいいかと申しますと、未開であり、未開拓の野生ということもできると思います。言葉を変えますと、文明の外に置かれた者は自然であつたということでございます。

先ほどバラモンの定めた規定から逸脱してしまった、十六歳になつても入門式を行わない人はヴリシャラになつてしまふということを申し上げましたけれども、それはバラモンのなダルマである、その規範から逸脱した者にほかならないわけです。しかし、それは、ヴラーティア・ストーマを實踐することによって、バラモンのなダルマに復帰することが可能であるということをお話したわけです。この自然には戻るけれども、文明の中にもう一度入ることができ、そういう余地を残したのが先ほど申しましたヴリシャラと呼ばれる人々でありました。

これに對しまして、ヴァサラカ、つまり、ヴリシヤラよりも一層悪いものといわれた釈尊たちは、バラモンのダルマには決して参入できない人々という意味であったということとであります。したがいまして、そういう人々は、チャンドーラと同等の価値をもつ者と考えられたということができます。ただし、ヴァサラとチャンドーラとは、必ずしもイコールではないのです。それは、結論をお話ししてしまいました後でお話しするつもりであります。

そこで、先ほどもお話ししましたように、文明は自然がこれに齒向かうとき、常にこれと対決するわけですけれども、自然が文明に對峙する限りにおきましては、自然は文明にとって非常に危険なものであるということもいえると思えます。

今、お話ししたことを整理して申し上げますと、バラモン中心の文明の中に生活するためには、バラモンのダルマを遵守しなければならない。ただし、このダルマから逸脱しましても、ヴラーティア・ストーマを実行することによって、もう一度このダルマに復帰する道が開かれているということをお話ししました。しかし、仏教者たちは、バラモンのダルマとは全く無関係と申しますか、バラモンのダルマに参入することは不可能な人々ということであつたわけです。

それでは、仏教の出家修行者たちの場合はどうだったのかということを考えてみますと、先ほどお話ししましたように、家庭生活を完全に放棄してしまいます。したがって、バラモンのいう、バラモンのダルマの中に生活する人々とは全く異った精神的風土の中で生活していた人々であったということがいえるわけです。この人たちは、当然バラモンのダルマから逸脱した人々であったわけです。それゆえに、彼はバラモン中心の文明にとっては、常に危険な人々と考えられていた。それが、先ほどお話ししました『スッタニパータ』の中で、釈尊が近づいてきたら、来るなといわれたということを物語っていると思います。

ところが、仏教でもダルマということをいうわけです。これはよく「法」と訳される言葉ですが、仏教では、「仏法」といいますように、仏教ではダルマということを非常に重用視いたします。したがって、仏教というダルマというのは、当然のことながら、バラモンのダルマとは異った内容をもっているはずで

では、仏教では何をもってダルマと呼んだのかということを取り返してみますと、先ほどお話ししたことにもかかわることですが、「苦」としての人間存在を成立させる理法をダルマと呼んだのだと思います。それを裏返して申し上げますと、苦としての人間存在か

らいかにして脱却するか、その脱却を実現させる理法をダルマと呼んだということができると思えます。そのダルマは、仏教の各段階でいろいろな形で説明されました。初期の仏教では、苦集滅道の四諦でもありましたし、十二縁起でもありましたし、縁起でもありました。あるいは、『般若経』になりますと、空の理法と申しますか、「空」ということでもありますし、また竜樹時代になりますれば空の理法、あるいは諸方実相、唯識思想でいきますと、阿頼耶識縁起という言葉で説明されたり、さらには如来像縁起などと呼ばれるものもすべて仏教でいうダルマを説明するものであります。ごく簡潔に申しますと、苦としての人間存在を成立させる理法、あるいはそれを裏返せば、苦の存在をいかに脱却させるか、脱却するかという、その理法をダルマと呼んだわけでありまして、バラモンのいうダルマとは意味合いの全く違ったものであったということができると思えます。

それは、ひとえに、いかにして苦としての人間存在を超越するかを目指すものです。言葉をかえて申しますと、仏教における自然というのは、苦としての人間存在を意味していると思えます。仏教は、それをいかにして克服するかを教えるものです。しかも大切なところは、それを克服するための方法であろうと思えます。その方法は、自然、つまり、苦としての人間存在そのものを否定するのではなくて、我々の心身を、我々の心を悟りに向

けて開拓すること。つまり、苦としての人間そのものを否定するのではなくて、我々の心身を、我々の心を悟りに向けて開拓することによって、それが実現できると考えたのであると思います。ですから、仏教の自然観というのは、苦としての人間存在そのものを否定するのではなくて、むしろ我々の心を開拓するのだ、開拓することによって自然との調和を保とうとしたということができると思います。

最も端的にあらわれているのは、四諦の中の道諦だと思えます。道諦のいっていることは、まさしく我々の心身をいかに悟りに向けて開拓していくか。これは事実上「八正道」です。これは、我々の身体そのものをいっているわけですから、それを悟りに向かって開拓するか。つまり、その悟りに向かって我々の心を開拓することによって、自然をいかに否定し、自然と調和する道を開こうとしたかということところが最も端的にみえるのは、四諦の中の道諦ではなからうかと考えております。

先ほどチャンダーラのことについて触れましたので、それを結論的にお話しして終わりたいと思っています。実は、仏教の文献の中にも「チャンダーラ」という言葉はたくさん出てまいります。だから、仏教の文献はチャンダーラが存在を認めているわけです。そういう意味では、仏教は、差別の存在というのを知っておりまして、差別の存在のある中

で出てきた一つの宗教であることは間違ありません。けれども、仏教の文献の記しているチャンドーラというのは、生活、服装が、仏教の出家修行者と全くそっくりなのです。チャンドーラは、出家修行者が住みましたように、木の下ですとか墓地ですとかジャングルの中にしか住めませんでした。しかも、彼らの身にまとっているものは、仏教でいうカシャーヤに相当するのと全く同じ。死体が身にまとっていたもの、人が捨てたものを身にまとっていたわけです。

ただ、違うのは、チャンドーラたちは、仏教の文献の記すところによりますと、うこん色のターバンをしていた。それから、職業があるのです。仏教の出家修行者たちは職業をもつことはできません。チャンドーラたちはどういう職業をもっていたかといえますと、大道芸、しかもそれは、多分アクロバットであったと思います。いわゆる曲芸のような大道芸を職業としていたとか、死体を運搬したり、死体を処理する職業をもっておりまして。そういった職業をもっていたということと、彼らは家庭生活を営んでいたという点、この辺は異っておりましたけれども、服装といい、住んでいる場所といい、チャンドーラと出家修行者を区別することはほとんど不可能なぐらいよく似ております。

しかも仏教の文献の中にこういうことが記されております。これは、舍利弗の述べた言

葉だと思いますが、「我々出家修行者たちが村に托鉢に入るとき、我々はチャンダラの青年やチャンダラの女性と全く等しい心をもつ」ということを述べているわけです。ですから、気持ちの上でチャンダラと全く同じ気持ちを抱いて村の中で托鉢するのだということを、たった一回だけですが、仏教の文献の中に記しております。ですから、仏教の出家修行者たちは、自分たちもチャンダラと等しい人間であったということを意識していたということがいえるのではないかと思っております。

そういう意味で、日蓮がみずからを「旃陀羅の子」といったということもそうですし、法然上人だって、その当時としては身分が低いとされたであろう遊女に法を説いた。それから、一遍聖人なども、そういう人々の中に入って布教いたしました。そういう伝統というのは、法然上人の時代にも、鎌倉時代の仏教の中にも残っていたと確信しているわけです。

仏教の出家修行者たちは、バラモンの人からいいますと、自然の中に生き、自然の中で修行をした人たちですが、仏教の出家修行者たちの内部からみますと、彼らにとっての自然というのは、むしろ我々の苦としての存在、言い方を変えますと、悟りに向かって未開拓の心を自然と考え、それをいかに克服し、その中で調和していくかという方法を見出す。

うとしていたのだと思います。しかも、それは内面の自然を真っ向から否定するのではなくて、むしろ自分たちの心を悟りに向けて開拓していくことによって、それを超越しているとしていた。そこに仏教の大きな特徴があるのではないかと考えております。

日本文化と自然

筑波大学教授
奈良博順

(一)

言うまでもなく、宗教は、その信ずる立場で、現実の生活にどうアプローチするかというのが非常に大きな課題であろうと思います。それを私は応用問題と申し上げています。お亡くなりになりました服部英淳先生も、「かつて浄土宗は社会事業宗といわれていた」というお話をなさっていたのを承ったことがあります。まさに、社会事業というのは応用問題の一つだろうと思いますし、現に大正大学には社会事業のコースもあるわけでございます。

しかし、応用問題というのは、時代とともに社会の変化、世界の変化につれまして、いろいろな問題が出てくるわけでございます。先年から問題になっていきます臓器移植とか脳死の問題でもそうです。それから、きょうのテーマになっております環境問題もそうですございます。こういう問題にいかに対応するかということが、宗教の教化・布教、広くいえば思想運動にとって重要な課題だろうと思うのです。しかしながら、仏教教団全体の動きが悪いと申しますか、反応がいま一つということがあるのではないかと。私などは浄土宗に僧籍を置かせていただいているのですが、生活の大半は外にあるものですか

ら、外の人たちの話を承ったり、外から眺めておられますと、いささか無責任とお叱りを受けるかもしれません、率直に申しまして、もう少し何らかの動きがあってもいいのではないかと、そんな感じがするわけでございます。

そうなる理由の一つは、往生とか成仏という問題が、単に死後の問題として片づけられてしまうようなところがありまして、そのことが現代の問題に対するアプローチをゆっくりにさせてしまっているのではないかと、そんな感じがするわけでございます。つまり、厭離穢土、欣求浄土といいますが、この現実というのは汚いものである、だから、汚い世界を逃れて、せめて死んでからでもきれいなところ、お浄土へ行きたい。ということになりますと、現実の問題は素通りされてしまいます。一般の方の往生や成仏についての受け取り方には、かなりそういう面がありました。

確かに、法然上人が出た時代は、そのような状況にもあったわけでございます。しかし、法然上人の御法語などを読んでおりまして、「一念に一度の往生をあておき給える本願」というような言い方になりますと、単に死後の問題ではなく、今日、今の問題を解決していくことが永遠の命、永久の命につながるわけです。つまり、もっと現実の問題、現実の生活の中に私たちの解決しなければならぬ問題があるのではないのでしょうか。

環境問題もまさにそうであります。世の中汚れていて、排ガスだらけで、こんな世の中は早くおさらばしてあっちへ行きたいというのも、確かに一つの解決かもしれません。そういうことになりますと、平安末期のように、入水往生や捨身往生とかいうようなことをしたほうが、むしろ早く浄土へ往生できるということになるわけですが、法然上人の教えというのは、どうもそうではない。それなら、我々は今の汚れた環境問題に対してどうアプローチするか、ということを考えていかなければならないと思うわけでございます。

そこで、きょう私は「日本文化と自然」という大きなテーマを掲げました。

しかし、日本文化といいますが、範囲は広うございます。また、文化という言葉につきましても、解釈によっていろいろでございます。旧来の解釈ですと、文学とか芸術とか宗教、そのような問題を文化の問題として考えてきたのですが、このごろは、「生活文化」というような言葉がよく使われるようになりました。人間の生活そのものが文化なのだということになりますと、文化ということを非常に広く使うことになります。このごろ民族学とか文化人類学とかいうような学問が盛んになるに従いまして、文化という言葉が非常に広く使われるようになりましたのは皆さんご承知のとおりでございます。

そこで、日本人の生き方ということを考えていきますと、例えば日常生活の中のであらわ

れた考え方と、『万葉集』や『古今和歌集』に読まれている日本人の心と、天と地の違いがあるわけではないかと思えます。きょうのテーマに即していえば、自然についての考え方と申しますか、自然観、古代日本人に「自然観」というほどのはっきりしたものがあつたかどうか問題でございませうけれども、自然のとらえ方について、日常生活の中でのとらえ方と、こういう歌などに読まれた自然のとらえ方と、そう差のあるものでもないだろうと思えます。

そこで、二、三の例をあげながら、日本人の自然のとらえ方について、私の理解しているところを申し上げて、さらにそういう問題について従来の浄土宗の先達の中で求めるとどういうことになるか。そこで、昭和四十六年に亡くなりました椎尾大僧正の「共生」についての考え方に触れます。それから、そういう方々の考え方にあらわれました自然と、明治以後の日本を代表する思想家の一人であります和辻哲郎博士の自然のとらえ方を比較しまして、一つの問題提起を試みたいと思つておられます。

(二)

古代の日本人の自然観を申し上げますのに、『万葉集』や『古今和歌集』でなくて、

『古事記』『日本書紀』でも構いませんし、『風土記』でもかまわないのですが、ここでは、『万葉集』にふれてみます。『万葉集』には自然について歌ったものが非常に多い。日月星辰から天地、山河、草木等の自然が『万葉集』では歌い込まれているわけです。

それで、『万葉集』から三つばかり例を挙げました。万葉人にとっては、心の切なる思いをそのまま言葉で言い出すときに、その言い出す言葉が、まず自然を描くところから始まっていわけでございます。例えば、

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜まさやかにこそ

これは、版によりまして、「今夜の月夜あきらけくこそ」となっているのもございますが、一つの本にはそうなっておりますので、それを引用いたしました。この歌につきまして、岩波新書に入っております斎藤茂吉さんの『万葉秀歌』ですとかなり高く評価しております。それは、非常に素朴に自然を歌っているという点についてです。すなわち、自然というものを細かく分析するのではなく、自然全体をぱっと把握している、物を知るというのは、このごろですと物を分析しているいろいろ細かいことを知ろうといたしますけれども、そうではなくて、物の全体を一目で把握する。そのようなところに自然と歌う人との間にすき間がない。自然と非常に密着した姿がそこにあるということです。

自然について細かくみるには、自然との距離を置きまして観察することも必要なのですが、逆に自然と密着して語りますので、細かいことはいわずに、そこにありますように、「海の上に大きくなびいた美しい雲に入日が差しており、今夜の月はきつとすっきりしたものと思われる」と、本当に単純な事実を述べているだけで、こういう歌を歌えるということは、日本人と自然とは、そこに間を置かない、接触した状態があるからということになる。このへんにつきまして、島木赤彦さんが『歌道小見』の中で、心と物と相接触する状態を映す。あるいは、物と心が相触れた状態の核心を歌いあらわすということをおります。それは写生とういことを説明しているわけですが、「写生」というのは、ただまねをするのではなくて、文字どおり生を写すのだと。そこに自然と人間とが密着した姿が出てくるのだということになるわけです。それで、古代人というのは、こういう自然とまさに一体化した生活をしていた。それが、古代人の自然の一つの把握の仕方だということになるわけです。その他、

志貴皇子の 石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも

大伴家持の 夏山の木末こぬれの繁しじにほととぎす鳴き響とよむなる声の遙はるけさ

などの歌も同様に理解されます。

そのほかの面でも、日本人というのは自然と非常に密着した生活を送っているわけです。実は、このことは日本人ばかりではありません。中国の場合も、そういう感じが非常にするわけです。『万葉集』『古今和歌集』と『詩経』は非常に似たところがある。『万葉集』や『古今和歌集』というのは、『詩経』の影響を非常に受けているだろうといわれておりますので、その点は東アジアの人間に共通した自然に対するアプローチの仕方と考えてもよいと思います。

これは歌ばかりではありません。律令をみますと、令の義解に、受刑者への配慮が出てまいります。「立春より秋分に至るまでは死刑を総決することをえざれ」。立春から秋分までは死刑というものを執行しない。ただし謀反とか悪逆とか主人殺しとか、そういう大きな罪は例外とするということが出てまいります。

それから、まつり事の仕方などにいたしましても、まつり事を行うには時をもってする必要があります。春には春らしい命令の仕方があるし、夏には夏らしい命令の仕方があるという考え方をとっておりまして、「春に他の季節のまつり事を行うとたちまちわざわいが生じるから、春には春らしいまつり事をしなければならぬ」と、季節というものと生活というものとの相即をいっているわけです。そういうところにも古代人の自然と密着した生

活があらわれていると思うのです。そういうことは、その後もずっと続くわけです。

(三)

つぎに中世にいきますと、ここでしいて法然上人のお言葉を引きました。ご承知の『禅勝房伝説の詞』です。

又いはく、法爾道理といふ事あり。ほのをはそらにのぼり、みづはくだりさまになる。菓子の中にすき物があり、あまき物あり、これらはみな法爾道理也。阿弥陀ほとけの本願は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば、たゞ一向に念仏だに申せば、仏の来迎は、法爾道理にてそなはるべきなり。又いはく、現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。

こういう表現は、ご承知のように親鸞聖人の「自然法爾」について語った伝語にもございます。それから、明恵上人の「あるべきやうは」という表現にも同じような考え方が表現されていると思うのです。法然上人は法爾道理というっております。「ほのをはそらにの

ぼり、みづはくだりさまになる」。それから、親鸞聖人の「自然法爾」という言葉。

「自然」という言葉と「法爾」という言葉。この問題については、親鸞聖人のほうが長い文章を使って書いております。「自然」というのは、おのずからしかるといいます。「法爾」ということについて、行者のはからいがないとか、如来の誓いゆえにしからしむるを法爾という。「自然」という言葉と「法爾」という言葉はほとんど同義語に使っているわけです。そういうところからも、法然上人の法爾道理ということは、親鸞聖人の自然法爾という言葉と、基本的には同じ考え方の上に立っていると思っております。ただ、親鸞聖人の場合は、終わりのほうにいきまして無上仏の問題なんかが出てまいります。そのへんになりますと、法然上人の阿弥陀仏観と違ってくると思えますが、基本にある考え方は同じだろうと思っております。

自然法爾にしましても法爾道理にしましても、自然のもっている論理といえますか、ここでは道理という言葉を使っておりますが、自然がおのずから備えている道理・論理に従っていくということでありまして、そこには、やはり古代人と同じく自然と密着した生き方を求めているといえるでしょう。そのことが儒教のほうの資料にも出てまいります。

(四)

三番目に引ききましたのは、林羅山の『春鑑抄』です。

天地物ヲ生ズルノ心ヲ以テ心トシテ、人ミナ仁義ノ心ナクテハカナハヌゾ。故ニ仁・義・礼・智ハ、ミナ天ノ与フルトコロゾ。仁ト云モノハ、天理ニアリテハ、物ヲ生ズルノ心ゾ。人ニアリテハ、慈愛ノ心ゾ。

つまり、人間の仁、あるいは仁義というものは天の与うるところである。それは天理からすれば物を生む心であり、人間の立場にうつせば慈愛の心である。それをさらに続けまして、

夫人ト云モノハ、天ヨリ性ヲ生ミツクルニ、ソノ性ニ仁・義・礼・智ノ四徳ノソナハラヌモノナヒゾ。

人間というのは天から仁義を与えられている。それは、つまり人間の性である。その性に仁・義・礼・智の備わらぬものはない。その性とは何であるか。ここが法爾道理の言葉と同じような言葉なのです。

水ハ下へ流ル、性アリ、火ハ上へアガル性アルガ如キゾ。サルホドニ、人ノ性ニハ慈愛・惻怛ノ心アルヲ仁ト云ゾ。

つまり、人間の心には法然上人のいう法爾道理と同じように、炎が空に上ぼるし、水が下って流れると同じように、ごく自然の道理として性を与えられている。その性には、仁・義・礼・智の四徳が備わっている。つまり、人間には、そういう仁・義・礼・智の四つの徳というのが生まれながらにして備わっている。それが人間の自然である。そういう道理であるということになる。

実は、たまたま『春鑑抄』の中に、人間と自然との問題に触れているのがあったことを思い出しまして、もう一遍読み返してみました。前に読んだときにはこういうところにあまり注意をはらわなかったのですが、全く同じような表現が出てくる。法然上人と林羅山

は時代も違い。語る対象も違うのですけれども、同じような論理でそれを説明している。ここに日本人の自然の論理、儒教的に言えば天理ということになりますが、そのへんの認識で、非常に共通したものを感ずるわけです。

そういう点で、最初から『古今和歌集』、法然上人、林羅山と年代順に上げてまいりましたけれども、古代、中世、近世とたどってまいりまして、人間と自然というものを同じような論理で考えている。江戸時代、鈴木正三という禅宗の坊さんがおりましたけれども、その人の『盲安杖』をみましても、やはり同じような表現が出てまいります。きょうは、それは引いてごさいませんが、同じような論理が展開されている。やはり日本人というのは、自然の道理に生きるというか、自然の中に人間の生き方の原理を見いだして生きている。そういうところがずっと一貫している。

江戸時代よくいわれました言葉に「晴耕雨読」という言葉があります。私がこの言葉に接したのは大学時代でした。ユニークな先生がおりまして、学期の冒頭に「耕」を「講」に変えたらどうか、晴れたら講義に来て、雨が降ったら講義はサボって家で本を読んでいる、そういう生活をしたらどうだということをいわれまして、非常に印象に残っています。「晴耕雨読」という言葉は、大きな漢和辞典にも出ておりますし、国語辞典の大

きなものにもございますが、出典がわからない。「晴耕雨読」なんていう言葉ですから、江戸時代のインテリ、知識人が理想とした生活かなと思っていたのです。それなら、江戸時代の儒者のような知識人の著者に出てくる言葉ではないか、日記などに出ている言葉ではないかと思って、機会あるごとに辞書を引いたりいろいろしているのですけれども、どうも出典がわからない。だれとはなしにいわれた、江戸時代の一つの生活理想だと思っております。

ちょっと余談になりますけれども、「医は仁術なり」という言葉がございます。「医は仁術」という言葉はもちろん江戸時代からだろうと思ひまして、江戸時代の医者の一つのあり方として、そういうものを儒者のような人が説いたのかと思って調べてみましたら、江戸時代のはなし家か何かの言葉の中に出てくるようです。つまり、一般の市井の人が、赤ひげのようなお医者さんを非常に期待して、庶民の中から出た言葉のようです。ということは、江戸時代も仁術に徹するお医者さんはどうも少なかったのだなということ逆を思うわけです。

こういう言葉を探っていくとなかなかおもしろいのです。「晴耕雨読」なんかは、まさに自然の生き方を表現したものの、日本人の生き方を非常に端的に示していると思うわけです。

す。こういう生活が日本人の一つの理想であったわけです。こういう生活というのは、何も江戸時代だけに突然出てきたのではなくて、日本人の自然に対する姿勢というものを一貫してみていきますと、こういう生活が出てくるのはごく当然と思えるわけです。

(五)

ところが、こういう生き方が明治以後変わってまいりました。しかし、江戸時代までずっと一貫してきた日本人の生き方というのが明治以後途絶えたわけではありません。むしろそういう生き方を体系化といえますか、組織化して浄土宗の一つの宗教運動として展開したのが椎尾先生の共生運動だろうと思うのです。『椎尾弁匡選集』という一〇巻のものが出ています。これは選集ですから先生の著述全部ではございませんが、その第九巻に共生運動の基本的な資料が載っております。それが、「共生講壇」と「共生の基調」です。

この「共生講壇」というのは、戦後、「共生教本」という形で再刊されております。一部手が入れられておりますけれども、基本的には「共生講壇」が「共生教本」という形で戦後も出されまして、共生運動の聖典として使われております。「共生の基調」というのは、多分「共生講壇」をもうちょっとやさしく説明したものだ、内容的にはどうもそん

な感じがいたします。さらに両者とも「選集」の編集にあたって、読みやすいようにということで、漢字を少なくしたり、表現を少々変えたりいたしました。

椎尾博士が共生運動を始めましたのは大正の末期になるわけです。どうしてそういう運動を始めたかといえますと、「共生は出門に」というところにあるわけです。そのところをちよつと読んでみますと、

五念門にしても五正行にしても、宗教生活の大切な形式を教えたものでありますが、いづれも入門に重きをおき、出門は比較的薄く説かれているのであります。この点は、共生においても取捨して出門に重きをおいて組織したのであります。すなわち、すでに信仰をもち得たものとして初めているのであります。五正行を今一度くり返してみますと、信仰の準備としては読誦行で領解を主と致します。解つたらもう一度心に味わってみる。解るようになったら身をつかつてやってみる。いくら有難くなったらく味わってみる。なおよく解る。南無阿弥陀仏にでる。この一声でもたものはあとはどうするか。このあとの説明がすべて薄いのであります。今日の宗教が實際生活と縁遠いのは、入門が本気でないためでもありませんが、出門の方の説明が充分でないからであ

ります。ゆえに共生のやり方は出門に充分力を入れております。これ一般の習いや説明とは合わないかも知れませんが、「共生のつとめ」が南無阿弥陀仏で始まっている所以であります。（『共生講壇』）

「共生のつとめ」といいますのは、共生の理念を日常使っている言葉で表現した現代版の経典とご理解下さればよろしいと思います。ここで述べられておりますように、信仰というのは、浄土宗でいいますと往相と還相という形にもなりますけれども、大乘仏教流にいきますと、上求菩提、下化衆生ということがあります。この上求菩提という、そちらが入門、下化衆生が、ここでいう出門に当たると思います。あるいは、往相が入門で還相が出門ということになります。

先ほどから申し上げてまいりましたけれども、信仰の立場でいかに現実の生活に働きかけるか。私流にいうと、応用問題に対するアプローチということになりますけれども、その共生会の共生運動というものに椎尾先生が乗り出したところは、やはりそこにあると思うのです。しかもそれは、先ほど、「浄土宗といえれば社会事業宗といわれてきた」という服部先生のお言葉を紹介いたしましたけれども、まさに社会事業宗としての浄土宗が社会

へ向かって働きかける、そういう伝統を椎尾博士は共生運動という形で展開したのだと理解しております。

その共生という概念は何かといいますと、「協同共生」ということで、縁起の考え方に立っているということを椎尾先生は述べていらっしゃるわけです。ほかにもこういう説明をしたところはたくさんありますけれども、今回は、ここの部分だけ引きました。

仏教は無我の根底に立ち縁起の実相を主張いたします。すべてに個在の孤立を認めませぬ。一切は縁によってできあがってゆくのであります。誰人といえども、一個人として独存すべきものではありません。この肉体が衆縁の合成であるように、その存在もまた衆縁の力であります。縁に遠近の差別こそあれ、全法界をあげて、一切が相依相関でないものはありません。すべては協同であり共生であり社会のおかげであります。各人ごとごとく社会の一員として完全に立たねばなりません。どんな山奥の一軒家でも、全然社会と没交渉であり得るものではなく……（『同右』）

そういう相依相関という縁起の考え方から、この「共生」という言葉を使われているわ

けです。これは「きょうせい」と読みますと、いかにも新しい言葉のようでございますけれども、善導大師の『往生礼讃』には「願共諸衆生」と出てまいりまして、総願偈にも「共生極楽」と出ております。「ぐしゅう」と読めばわかりますけれども、「きょうせい」といいますと、何か浄土宗と関係のない、別の原理のように思われます。

このへんにつきまして、大正大学前学長の真野竜海先生が、『椎尾弁匡選集』の月報でそのことに触れられていました。『椎尾弁匡選集』月報第四号の「最後の爾書道場で」という真野先生の文章の中に、この縁起の「縁(えん)」と、願共諸衆生の「共(ぐ)」という言葉は同じことをいっている。縁起の「起(おこる)」という言葉と「生(しょう)」という言葉は共通するのである。そういう関係で「共生(ぐしゅう)」と縁起は一緒なのだということをおっしゃっている。椎尾先生の縁起と「共生(ぐしゅう)」との関係をとらえる一つの例としてご紹介しておきます。

では、これと自然問題とは一体どう結びつくのか。そこで、一つの歌が椎尾先生にございます。

ひといきもくさきのいきともなれば

このみさながらあめつちひろし

これは、人間の一息一息と自然の呼吸とは通じているのだ。ここで人間と自然とが「ともいき」しているのだ。まことに人間の命というのは自然に支えられている。逆に、人間の吐き出す炭酸ガスが植物に命を与えている。命というのは、単におれの命、人の命というのではなくて、まさにこの宇宙全体が、世界全体が一つになって大きな命としてまとまっているのだ。生かされているのだ、ということを行っているわけでございます。実は、ここに共生という考え方と自然との関係が出ています。

しかも、自然と人間との関係につきましてもっと端的に表現しているのがあります。これは椎尾選集の第一巻の『釈迦に仏を見る』に出てくるもので、お釈迦さんがお悟りを開いたときのことを椎尾先生が説明しているわけです。これは、まさに椎尾先生の釈尊の悟りについての一つの追体験だと考えられます。それは「草木との共いき」と「大自然との共いき」の発見だというのであります。ここでは、椎尾博士がご自分の共生という理念に立って、共生という思想に立って、お釈迦さんの悟りを追体験しているわけです。語ることはお釈迦さんの悟りでありませうけれども、ここに椎尾博士の共生思想に立っての一

つの自然観、人間と自然との関係についての見解が出ていると思うわけです。

釈尊が家を出て宗教的な苦行をして、いろいろの修行や問い学びをして、得るところはあるようには考えましたが、まだどうも本当でないというので、ついにひとり悟りの木のもとにすわられて、まず感じましたのは、今までもそうしたことがあったが、ひとり心静かに十分落着いてすわった時に、何か一切の力で自分が安らげられ、力づけられるように感じまして、すわることに息すること、息することに大きな新しい、有難いものを感じました。ゆるやかに息を重ねるにしたがって、息することに言い知れぬ尊いものを感じました。ふと気がつけば、呼吸は前の草や木に通うて、草木のある方から来る呼吸に向きやすい、つながりやすい何物かを感じました。ふと、それは草木のない方から来る呼吸よりは、草木のあるほうへ呼吸がよく素直に行われることを感じました。（『釈迦に仏を見る』）

余談になりますが、椎尾先生は、和語の仏教、日本語の仏教ということをしるしばおっしゃいました。それは、釈尊は説教するときに、地方へ行けばその方言でやった。

わかりやすい言葉を使わないといけないのだとおっしゃって、和語の仏教ということをよくいわれた。確かに法然上人は、仏教を日本語で表現した。しかも日本語の法語というのは、横川法語が一番先だといわれ、異論はありませんけれども、恵心僧都のものだといわれています。その後の法然上人になりますと、和語による法語はご承知のようにたくさんあります。仏教を日本人に近づける大きな役割を果たしたと思いますが、それを受けて、椎尾博士も和語による仏教ということをおっしゃいました。ところが、椎尾先生の文章は「てにをは」が独特で、逆にわかりにくい文章が多うございます。聞いていたほうがむしろわかる場合があります、ここもどうもそんな感じがいたします。

大きな呼吸は、広々とした野原に次々にある草木をとおして行われてくる。私が息つくのではなく、広々とした呼吸の中に私は——浮かぶ魚が水を抜けておるのではなく、水に魚が浮かぶのである。大空の空気の流れの中に私が浮かんたのである。浮かべられたのであり、息づかさされたのであり、力づけられたのである。私は大きな力に養われているのであって、私が生きているのではない。私はこの大きな呼吸、大気の流れ、草木の生き生きとした力に言い知れぬ尊さと深い有難さを感じずにはおられない。(『同右』)

以下省略いたしますが、そういう自然と釈尊との共いき、そこを通して人間を囲む大きな力というものをいわれるわけです。そのことは、「大自然の共いき」という次のところへ行っても出てくるわけです。こういうところに、自然と人間と密着した中に人間の生を求め。そういう中に積極的に人間の生、生きるということをみていこうとするとところが出ていると思うのです。つまり、自然を単なる自然としてみるのではなくて、阿弥陀仏の大きな力、そのような観点から自然というものをとらえているわけです。

(六)

こういふとらえ方と比較しまして、和辻哲郎博士の有名な『風土』があります。だいた五十代から上の方にとりましては和辻先生のは非常に親しみのあるものですが、今の若い方には、だんだん忘れられてきております。和辻先生は、『原始仏教の実践哲学』を初め、仏教について非常にユニークな研究成果を発表されております。しかも仏教だけではなく、古今東西にわたって幅広い学問をなさった方で、東京大学に倫理学教室を開かれたり、日本倫理学会をつくられたり、文化勲章ももらわれた。日本の思想関係の学者と

しましては、津田左右吉さんや村岡典嗣さんと並ぶ第一人者として、今でも日本の思想文化の問題になりますと、和辻先生の名前は必ず出てくるわけです。その和辻先生の『風土』は、ユスネコで英語にも翻訳されているはずですよ。

今は飛行機でサツと行ってしまいますけれども、和辻先生がドイツに留学されましたころは船で南に下ってインド洋を通じてヨーロッパへ行っただけです。その間に船の上で経験したいろいろな気候についての自分の実感を基礎にいたしまして書き上げたのが『風土』なのです。そういうところから、和辻さん流の非常に直観的な物の把握の仕方、客観性がないという批判もございますが、ご自分の体験を通した風土論として、と同時に、日本文化論としても、アジアの文化論としても、批判はありますけれども、それなりに評価されている本なのです。その中で、アジアの気候の特徴をモンスーンとしてとらえておられます。モンスーンの気候について述べたところを読みますと、その特徴の一つは湿気にあると指摘した上で、次のように述べています。

湿気は最も堪え難く、また最も防ぎ難いものである。にもかかわらず、湿気は人間の内に「自然への抵抗」を呼びさまさない。その理由の一つは、陸に住む人間にとって、

湿润が自然の恵みを意味するからである。洋上において堪え難いモンスーンは、実は太陽が海の水を陸に運ぶ車にほかならぬ、この水のゆえに、夏の太陽の真下にある暑い国土は、旺盛なる植物によって覆われる。特に暑熱と湿気とを条件とする種々の草木が、この時期に生い、育ち、成熟する。大地は至るところ植物的なる「生」を現わし、従って、動物的なる生をも繁榮させるのである。かくして人間の世界は、植物的・動物的なる生の充満し横溢せる場所となる。自然は死ではなくして生である。死はむしろ人間の側にある。だから、人と世界とのかかわりは対抗的ではなく、受容的である。それは砂漠の乾燥の相反にほかならぬ。

が、理由の第二は、湿润が自然の暴威をも意味することである。暑熱と結合せる湿润は、しばしば大雨、暴風、洪水、旱魃というごとき荒々しい力となって人間に襲いかかる。それは人間をして、対抗を断念させるほどに巨大な力であり、従って人間をただ忍従的たらしめる。

つまり、和辻先生の理解によりますと、モンスーン地帯の自然に対して人間というのは受容的であり、忍従的な姿勢をとってきた。このことは日本の場合も同じだということに

なるのです。こういう非常に受容的、忍従的、別の言葉でひっくり返していいかと、要するに消極的な人間の生き方。和辻先生流にいいかと、気候、風土が日本人をそのようにさせるのだということにあるわけです。こういう受け取り方と、今述べてきました椎尾先生流の自然に対する受け取り方。さらには、その前の林羅山の『春鑑抄』にしましても、法然上人の法爾道理ということにいたしましても、自然というものと、もっと密着して、自然とともに生きるといいますか、むしろ自然の中に生きる原理というものを積極的に見いだそうとする姿勢があるわけです。

ところが、和辻先生の場合ですと、それが非常に消極的になる。こういう受け取り方と、いいますのは、自然というものに対して絶えず抵抗して、それを征服していこうという、いわばヨーロッパ的な考え方、受け取り方からいいますと非常に受容的、忍従的になる。受容的、忍従的という受け取り方が、むしろ明治以後のヨーロッパ的な発想を身につけた日本人の受け取り方ではないか。和辻先生は仏教論も研究し、日本の文化についても詳しいのですけれども、ヨーロッパ思想の洗礼を受けている和辻先生的な受け取り方ではないかと思うわけです。

特に明治以後の日本人というのは、そういうヨーロッパ的な受け取り方、つまり、日本

の近代化、それは同時に西洋化であったわけですが、日本の近代化、西洋化に従いまして、日本的なものをすべて否定するような風潮がありました。それは今でもあるわけです。そういう受け取り方が、どうも日本人の生活についている。環境問題とかにしましても、そのことがあるのではないかと考えるわけです。

(七)

最後に『ベルツの日記』というものをみてみます。ベルツというのはドイツ人の医者で、明治九年に日本へまいりました。東京大学に医学部をつくるために非常に貢献した人で、その後、明治天皇の侍医にもなった方で、明治天皇を非常に尊敬していた人です。私から上ぐらいだと知っているはずですが、「ベルツ水」という化粧水がありまして、それを考えたのはベルツですし、日本の温泉療法を非常に高く買ひまして、今でも草津温泉の地獄谷といったと思いますが、あそこへ行きますとベルツの碑が建っております。そのベルツが日本へ来ましたときの、明治九年十月二十五日の日記に、これは日記といひましても、ベルツが日本へ来て、日本での体験を本国の友人に書き送った手紙の一部分なので

あなた方は大体次のようにお考えになってしかるべきでしょう。すなわち、日本国民は十年にもならぬ前まで、封建制度や教会、僧院、同業組合など組織をもつ我々の中世の騎士時代の文化状態にあったのが、きのうからきょうへと一足飛びに我々ヨーロッパの文化発展に要した五百年たっぷりの期間を飛び越えて、一九世紀の全成果を即座に、しかも一時にわが物にしようとしているのである。従ってこれは真実、途方なく文化「革命」です——何しろ根底からの変革である以上、「発展」——彼は日本の明治維新というのはレヴォルチオン（革命）だといった。それはエヴォルチオン（発展）ではない——とは申せませんから。そして私は、この極めて興味ある実験の立合人たる幸福に恵まれたしだいです——これを彼は、サルト・モルターン（死の跳躍）だといっています。

ところが、——何と不思議なことには——現代の日本人は自分自身の過去ついては、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちが、それを恥じてさえいました——この教養ある人たちといえますのは、どうもその当時の明六社なんかに属した啓蒙思想家などのようです。当時の啓蒙思想家たちの「明六雑誌」なんていうのを

読みますと、ちょうどこれに相当するようなことを盛んにいつているわけです——「いや、何もかもすっかり野蛮なものでした（言葉そのまま）」と私に言明したものがあるかと思うと、またあるものは、私が日本の歴史について質問したとき、きっぱりと「われわれには歴史はありません。われわれの歴史は今からやると始まるのです」と断言しました。なかには、そんな質問に戸惑いの苦笑を浮かべていましたが、私が本心から興味をもっていることに気がついて、ようやく態度を改めるものもありました。

（岩波文庫『ベルツの日記』）

こういうところに、日本の明治維新をリードした知識人の日本の歴史に対する姿勢があるわけです。この姿勢は明治維新のときだけではありませんで、第二次大戦に日本が敗れた後の日本の知識人も同じような姿勢をとってきたことを私はこの目で見てきました。

これは今度のテーマとはちょっと違いますが、日本における知識人の役割、特に明治以後大いに問題にしないといけないと思っっているわけです。その知識人がお先棒を担いだ第二次大戦後は、咲きほこった社会主義がもろくも敗れまして、かつて元氣のよかった人たち、このごろすっかり沈黙してしまっておりまして、日本の知識人の役割はどういうも

のであったか考える必要があるわけです。

(八)

このような調子で日本の過去を否定してきた歴史が日本にはあるわけでした、ここで私たちはもう一度——もちろん古代を今の日本の状況に戻せといっても、そんなことはできません。過去の日本人の日本の自然についての考え方を、今の環境問題に照らして考えた場合どういふことになるか、考え直す必要があるだろうと思うのです。

今私達が生活していることが即環境問題につながっていく。公害をばらまいているようなことになる。車に乗れば車に乗ったで排気ガスを出す。空気を汚すことになりました。

それから、このごろお寺のご住職もゴルフなどにいらっしやいますけれども、私は、今、山梨に住んでおりますが、山梨県にゴルフ場がたくさんできています。そこで除草剤をまく。それが地下にしみ込む。特に私が住んでいるところは相模川の上流になります。それが相模湖に入り津久井湖に入り、川崎や横浜の人の口に入る。……一応規制はしているようですけれども、ゼロとはいかない。結局、長い間に下流で水を飲む方の健康を害する。これは、どうも殺生戒を犯していることにならないか。皆さん、そこまで深刻に考え

ないようですけれども、殺生戒というのは、何も切った張ったではなくて、命を大事にしない。私はゴルフをやるうかやるまいかと思っっているうちに、こういう問題が出てきたのでやめたのです。だから、気楽にいえるのかもしれないけれども、ゴルフをやるということは、だんだん人間の命を縮めることになる。どうも殺生戒につながるのではないかと。ところが、その水を飲む人たちが来て、平気でゴルフをやるわけで、どうも、自分で自分の首を締めているようなことにもなるわけです。

さらにいえば、このことは、現代に生きる我々の一つの宿業ではないか。「宿業」という言葉を思い出すわけでございます。どうもそういうところまで考えないと、この問題にはアプローチできないのではないかと考えているわけでございます。

きょうこちらへお邪魔する電車の中で、村上陽一郎さんの『日本人と近代科学』（新曜社刊）という本を読んでおりました。これは昭和五十五年に出た本なので、やや古い本ですが、最初のところで、「科学技術と近代の理念構造」という論文を載せていらっしやいました。十年前というところ、環境問題がかなりやかましくなってきた。そういう中で、自然にどうアプローチするか。そのために、ヨーロッパ人の自然についての考え方、日本人の自然についての考え方を比較しながら述べていらっしやるわけです。最後のほうにいきま

して、

欧米、特にヨーロッパでの自然保護の思想における自然とは、決してかつてあったがまま、現在あるがまま、みずからそうある状態のことをいうのではない。オランダの歴史が端的に語っているように、自然とは人間が快適に生活するための環境なのである。このような人間のための環境としての自然という考え方は、既に見たように、その背景にキリスト教があることは明らかである。この観点に立てば、自然に手を加えないで、ある歴史上の一点における自然の状態を保存しようとするだけが自然保護ではなくて、そのことを含めて、また自然に手を加えることも含めて、自然を人間のために制御することが自然保護なのである。

と書いています。ヨーロッパ的な考えでいうとそういうことになる。「キリスト教的な」といいましたのは、キリスト教的な考え方でいいますと、自然というのは神のためである、人間のためにあるということですから、人間が快適に生活するための環境という考え方にもなるわけです。ところが、これは、きょう述べてきました日本人の自然について

の考え方と違うわけです。「かつてあったがまま、現在あるがまま、みずからそうある状態」といつていますのは日本人の自然についての考え方で、我々日本人にとって、自然であるがまま、あったがまま、文字どおり、みずからそうあるものとして、いいかえれば自分にとって所与として存在している。それゆえ、自然保護とはあるがまま、あったがままの状態を保つことにはほかならない。日本人はそう考える。しかし、ヨーロッパはそう考えない。確かにこういう問題になってくるだろうと思うのです。

そこで、環境保護というのは具体的には一体どのように考えたらいのか。これは、日本人全体にとっても大きなテーマだと思うのです。人間が快適に生活するための環境として割り切るのか。それとも、あるがままの自然というものを考えるのか、あるいは両方融合したような、今までの壊れてない自然をそのままにして、壊れた自然については、人間の生活にマイナスにならないような状態に保つことを考えるのか。いろいろな選択肢が出てくるだろうと思うのです。

やはり我々にヨーロッパ人のように考えろといいますが、我々はヨーロッパ人ではない。これは『ベルツの日記』ではありませんが、明治の啓蒙思想家たちの中に、特に津田真道なんかは、日本を開化するために日本人全体をキリスト教信者にしろ、というのは、

文明の進んだヨーロッパ人はみんなキリスト教信者である。だから、日本人がクリスチャンになれば日本の開化も早いだろうという議論を、一つの提案として『明六雑誌』に投稿しています。このように、明治の初期には非常に短絡な考え方があったわけです。そういう短絡的な考え方で、日本人は明治以後引っ張られてきているわけです。意識をそこまで変えることはまさに無理なことなのです。

— そういうことを考えてまいりますと、自然についての考え方にしましても、ヨーロッパ的な考え方を、そのまま日本人にあてはめることはまず無理なことだろうと思うのです。そうすると、我々は我々の伝統的な自然についての考え方というものを踏まえながら、壊れてしまった自然はもとに戻らないならしようがないわけですから、現状を踏まえてどのようにするのか、そういう具体的な問題になるだろうと思うのです。そういう問題を、今の立場で改めて考えてみる必要があると思っております。

地球環境と宗教

埼玉工業大学 前学長 武藤 義一

私は実は曹洞宗の僧侶でございまして、明治以前ですとなかなかこういふところに参上できなかったのかもしれないですが、現代では問題ありません。生まれは秋田県の海岸の小さい町でございまして。

さて私が〈環境〉という言葉に初めて接したのは、宇井伯寿という東大の印度仏教学の大先生が、「仏教では吾々と環境世界を生ずるものをKarmaであると考え」と、本に書いておられるわけです。そのときは括弧して「カーマ」、そしてまた「業」という字を使っておられる。昭和十五、六年だと思えますけれども。それで、仏教哲学というのは〈環境〉なんて難しい字を使って、これはえらいことだと思いました。

しかし、その後それを私が商売にするようになるとは、その当時、仏ならぬ身ですから、知る由もなかったのですけれども、私は今、六本木にあります東京大学の生産技術研究所というところにずっと助教授、教授で勤めておりまして、昭和四十九年から三年間はその所長もやっております。五十四年に定年になりまして、松川先生のおかげで今います大学に移りまして、昨年学長を退任をいたしました。

その間の私の研究部門は工業分析、例えば水銀とかカドミウムの微量なものを分析するのが私の仕事でございまして、簡単に早くできるものを探すということをずっと何十年か

やっております。

そうしたら、水俣病が昭和二十八年、四日市ぜんそくが昭和三十六年、文部省の中にいろいろな研究班ができて、とうとう昭和五十二年から環境科学特別研究というのを科学研究費で設けまして、それができてから二、三年目に私が三年間総括代表をやりました。

ただ、この研究は非常にむずかしい研究でございまして、日本の環境の研究というのは不幸なことに、ひどい公害があったものですから、公害対策から始まりました。日本以外の大学及び研究所の公害の研究というのは、生態学です。これは一九四〇年ちょっと前からいかに、ミネソタ大学の周辺で始まったんです。若い夫婦の植物・動物学者があつた近くの沼をよく調べて、食物連鎖の、前からわかっていたことを確立したのです。アミーバーをちょっと大きいのが食べて、それをまた大きいのが食べて、だから、どっかでそれが狂うと大変なことになるということを発見されたのですね。世界の学術の系統は生態学が主流でありますので、私もそれを受け継いで、公害防止はやらなければいけない、基本的なこととはやるけれども、大事なことは通産省、やがて環境庁もできましたから、そういうところでした。やっぱりやっていただけいいということ、生態学系の方に重点を注ぎました。

したがって、それを総まとめするのは学会会議、そして学会の国際連合はICSUという、本当の大学の専門家でないと知らないのも、活動が一般にあまり有名ではないのでございませう。そのうちに、私がそういうことをやっておるちょっと前から、中央公害対策審議会（中公審）の特殊測定部会の主査をやらされて、これは今日まで続いております。何か新しいものを規制しようとする、その測定法を必ず諮問がありまして、答申をするわけです。

それから、昭和四十八年から、公害防止管理技術者というのをある一定の規模の工場には必ず置かなければいけないというので、その国家試験委員もやりました。あと、分析をちゃんとして公害を防止するような証明をしなければいけない。それも国家試験の委員をやらされまして、どっちも二、三年前に、年を取ったという理由でやっと免除していただいたんです。だから、考えてみると環境問題には随分昔から縁があったんですけれども、悲しいかな、測る分析ということだけでございました。

日本人は環境についてどういうように考えていたかといえますと、ここにあるのです。これは私知らなかったのですが、昔の環境庁の総務課長が調べてくれたのですが、日本人の環境観というのは、一〇〇一年ごろ書かれたと言われている『枕草子』に出ているそう

です。国語の先生がおられたら、それはうそだよと言われるかもしれませんが、その中に、環境がいいことを「いとつきづきし」、環境が悪いのを「すさまじ」と表現されているそうです。つきづきしいものは一専門家の前で恥ずかしいのですが、「春は曙。やうやう白くなりゆく」云々、「夏は夜。月のころは更なり。闇もなお螢の多く飛びちがえたる」。 「秋は夕暮」。 「冬はつとめて」、朝早くということですね。当時暖房のないときに、朝早いのが清少納言は非常によく見えたのでしょうね。宮中で当番のお女中が火種をまとめておこして、各部屋の火鉢にそれを一つずつ配って歩く。なかなかいい姿だ、と。まあ、それを配って歩くお女中さんはあまりよくなかったかもしれないけれども、清少納言はそう言っております。

そして、環境が悪いのは何かというと、昼ほゆる犬。そりゃそうですね。それから、春の網代とかいがあるかもしれませんが、あと、これは会社で話をするとき必ず出すんです。社宅で定期昇給に遅れた社員の家、これが一番環境が悪いと云うのです。だから、日本人は昔からこういうところに非常に興味があったということがよくわかります。

しかし、公害問題は日本はわりあい遅い。世界の歴史で公害問題で一番騒いだのは、一二一五年、ロンドンです。イギリスのジョン王の時代、マグナカルタという大憲章制定

のときにイギリスの全土から大僧正と領主が参集して、王様が勝手に税金を取ったり勝手に人の土地を奪うのをやめろと王様に迫って、あの大憲章にサインさせたんです。

そのときにちょうど石炭を暖房に使い出したんです。もうもうたる煙を出した。ロンドンには戦後ちょっとの間も、そのもうもうたる煙を出していたんじゃないでしょうか。地方の大気のきれいなところから来た人が、それじゃかなわないうけですよ。あれやめさせてくれという請願書をジョン王に出したというのが、公害問題が大きくなった最初であろうと言われています。

日本では、私知らなかったんですが、一六四八年、一七世紀の半ば、慶安の御触書というが出ています。これは水質汚濁なんですけれども、下水と井戸をきれいにし、みだりにごみを捨ててはならないという御触書が出ております。『慶安太平記』なんかのあったところでございますから、そのころから江戸というのはもう大都市で、ごみ処理は困っていたんだろうと思います。

それから、明治十年にコレラが大流行いたしましたして、問題は人間の出すし尿その他にあるということで、至急対策を考えなければいけない。そのうちに大阪に工場がどんどんできて、煙突から煙が出て著しく住みにくくなった。それを瞬時にやめたんです。どうして

やめたかと言うと、煙突から煙を出すのが悪いので、大阪府の条例というのを出して、煙突を立ててはならないとしたんです。そして、府庁に煙突が立っているかどうかを見る監視部というのができて、そこに役人がいて、それがずっと残っていたのです。それが今の大阪府の公害部になっているのです。それで、あそこに煙突があるというのと、警告するんです。翌日また行って、それがまだ立っていると、すぐ工兵隊が行って、それを憲兵と工兵で瞬時に取り壊したんですね。逆らえばドーンとやったわけです。一遍に煙突がなくなったら、その後日清戦争が起きて、煙どころじゃない、どんだん軍需品をつくれということ、それはとうとうだめになってしまったという歴史があるんです。それから、水については有名な足尾の鉍毒事件というのがあって、大変な騒ぎになったわけでございます。

公害問題はきょうなるべく触れるなということでございますので、触れませんが、私も、私たちの環境の研究グループでは、地域環境と書いております。どこが違うかと言うと、要するに何か困るものが出て、それが害を流すのが公害なんです。そういう意味では、地球環境も地域環境もあまり差がない。ただ、その汚染の物質の寿命が長いか短いかによるのです。寿命の短いのはとどまっているわけですから、その地元で災害を与える。

寿命の長いのはそこで災害を与えないかわりに、全地球に広がっちゃって、気がついたら何か禍のもとになっているというんですね。

例えば水銀やカドミウムは非常に活発な金属ですから、寿命は短いのです。しかし、その活発な間にいろんな毒害を流して、やがて消えていく。しかし、炭酸ガスは長く滞留して、例えば東京の上空にある炭酸ガスがどこかに流れていってすっかり置きかわるまでに、数年かかると言われております。

この置きかわるといふのはなかなか大事で、このごろなくなりましたけれども、例えばガスの湯わかし器ですね。あれボーッと燃やしていると、あそこから一酸化炭素が出るんですね。それとともに、酸素をどんどん取るんですね。それが置きかわる時間が案外長にかかるのです。だから、酸素と CO の中毒で死ぬことがよくあります。東京なんかは朝と晩で酸素の量がだいぶ違います。朝は多いんですけれども、夕方になると三%ぐらい減ります。酸素が今二一%ですか。一八%ぐらいに減っております。だから、そういうときに置きかわりが遅いと、大変なことになるわけでありまして。

そういうぐあいになっているわけですが、地球の問題を考えたときに、地球は非常に特異な惑星だというのは皆さんご承知と思います。地球を中心にして、太陽に近いのが金

星、遠いのが火星でございませう。大体比重は同じくらいのものでございませう。大気圧は、地球はもちろん一としまして、金星は九〇で火星は一三二三分の一。表面温度は金星が五〇〇度、地球が一五度、火星はマイナス六〇度。大気の組成がものすごく違うんです。大体金星と火星はほとんど炭酸ガスです。地球は窒素、酸素が二二%で、炭酸ガスは〇・〇三%しかない。アルゴンが一%ぐらい。火星は一、二%アルゴンがある。どうしてこうなったかということはまだいろいろ研究中でございませう。しかし大体は、地球ができて十億年かたつたころ、火山の爆発で溶岩が噴き出して、その中から水と炭酸ガスが噴き出したんです。窒素も少しづつ出てきたわけです。水はこの一五度という温度があつてだんだん冷却して水たまりになって、やがてそれが海になった。そうすると、海の中で生物が発生して、その生物が炭酸ガスをとって同化作用をやるとともに、火山の噴出と一緒に石灰岩がたくさまできてきたんです。その石灰岩と炭酸ガスが反応して CO_2 というサンゴみたいなものができるわけですね。それがどんどん沈着して、炭酸ガスがなくなったわけです。そのかわりに酸素がたくさん出てきたために、生物が海から陸に上がれるようになったのではないかとおぼえております。だから、海と炭酸ガスを減らしたのは、何十億年の生物のおかげであろうというのが今定説みたいになっております。これにはまだ少し問題がないわけ

もないんですけれども、とにかく地球は非常に変わった星であるということだけは確かでございます。

あと、有名な木星は水素があるんですけれども、水素が八二%でヘリウムが一八%、土製は水素が九四%、ヘリウム六%というようなことになっています。だから、いつか知らないけれども、宇宙開びやくで、大きいビッグバンというのがどーんと起こって宇宙が始まったときに、水素とヘリウムができました。それをそのまま持って、やがてこういう惑星にまで行ったんじゃないかと考えられております。この辺は勉強すると非常におもしろいところでございますけれども、もう私なんぞには追いついていかれませんので、このごろ天文学がだいぶおもしろくなってきたので、少し若かったらと思わないでもないんですけれども、ちょっと残念な感じがしております。

資料に、地球環境問題というのを九つか十挙げております。何回か講義を聞いておられますので皆さんご承知だと思えますけれども、一応書いておきました。一つは地球温暖化、二つはオゾン層の破壊、三つ目が酸性雨、それから熱帯雨林の減少、砂漠化、生物種の減少、海洋汚染、有害物移動等々でございます。

それがどうして起こってきたかということは、私など申し上げなくてもいいんですけれ

ども、科学技術があまりに急激に進歩したからです。第二次大戦直後に、ドイツの哲学者あるいはアメリカの哲学者が言っております。技術はテクニクですね。ヴィッセンシャフトのテクニク、科学技術が進歩したけれども、ゼーレンテヒニシュ、精神技術が追いつかないということ、これは社会学者だと思いますが、ドイツの方が言われたそうです。

その精神技術とは何かと言うと、克己心を鍛えるとか自制心を鍛えるとか、事の成り行きをよく考える、これは一つの技術だと言うんですね。確かにそうかもしれません。若いうちからいろいろ鍛えていたかないとできないようなものがありますから。そういうように科学技術があまりに急激に進歩したために、人口が増加する。それに伴って資源が枯渇し、環境が破壊される。先進国はどんどん進んで、後進国は置きざりにされる。南北格差の急浮上と、それが非常に深刻になっているということがいろいろな問題の根源にあるというふうに言われております。

地球温暖化とかそういうことについては前の講義で聞いておられると思いますから、繰返しをやめて、なぜブラジルの会議でアメリカが反対したかですね。科学的な研究で、まだ割り切れない部分があるのです。それをまずアメリカは取り上げまして、まだわかっ

てないことがたくさんあるじゃないかというように言うのを言って反対したわけですけども、これはどういふことかと言いますと、たくさんあるのですが、一番端的に問題になっていますのは、化石燃料というのは石炭と石油です。燃やして、そこから出る炭酸ガスの量というのは、推定で年間二二〇億トンです。それから、森林がどんどんなくなって、田んぼになったり畑になったりする。そうすると、炭素同化作用とかそういうことで、炭酸ガスが固定さるべき運命のものが固定されなくて残る。それが七〇億トンあります。そうすると、合計二九〇億トン年間に炭酸ガスが放出される。そのうち大気に残っているのは、測ると一三〇億トンです。海の水が吸収いたしますけれども、たかだか九〇億トンということがわかっています。そうすると、残りの七〇億トンというのは一体どこへ行っているんだということを今研究中なんです。

それで、化石燃料が主なる元凶であるという学派と、森林の減少こそが地球汚染の一番元凶だというのと、世界の学界が真っ二つに分かれております。それぞれの言い分があるわけです。大気物理学者と海洋学者は、石炭・石油を燃やすためだと言っているんです。

それに対して森林生態学者は、それよりは森林がなくなる方がはるかに多い、と。ちよ
うど七〇億トンというのは森林減少に相当するから。

これはうそだと言ってしまえば片がつくんですが、軍配は森林の方に挙がっているんです。それは放射性同位元素というのがあって、今いろんなものの年代推定というのはそれでやるわけです。だから、あちこちで非常に古いお寺とか寺院の跡が見つかったとき、これは何千年前だというときには、そこに含まれている放射性同位元素をはかって年代測定というのをやるわけです。炭素の14というのを主にはかるわけです。そうすると、その炭素の14というのが大気の炭酸ガスの中かなりあるんです。石炭と石油の中には炭素14という放射性同位元素がありません。だから、これは森林から出てきたということは明瞭なんです。この七〇億トンがどこへ行ったろうということを、今いろいろ追求をしております。

一つは、その炭酸ガスがまたカルシウムかなんかと化合して、新しい農薬、肥料になっているんじゃないかという説が出ております。そんなばかな、というのと、そうかもしれないというようないろんな意見があって、それから、海水も、はかる場所で炭酸ガスの量が非常に違うのです。倍ぐらい違ったりするので、私なんか意見求められると、それははかり方がどっちか悪いんじゃないかと言うもんだから、これはだめだといってあまり聞きに来ないんですが、いろんな学者に聞いてみると、おまえの言うとおりだ、しかし、どっ

ちかに味方すると問題があるから黙ってるんだということを言っておりました。まあ、そういうこともあるだろうと思います。

温暖化温暖化と言って非常に騒いでおりますけれども、反対派もいるんですね。だんだん冷えてくるという派もいるんです。それは二十万年ぐらいの長いスケールで、五千年とか一万年の単位ではかると、今地球はまた冷えかかっているときなんですね。だから、それはすぐは冷えないでしょうけれども、また地球の四分の三以上が氷で覆い尽くされる時代がたぶんくるんじゃないかと考えられております。いろいろなところでその証拠があるんで、二万年おきぐらいに炭酸ガスの量がふえたり減ったり、いろいろしております。

それから、オゾン層が破壊されるというのを見つけたのは、南極観測の日本隊なんですよ。ずっと綿密に測定しているうちに、どうも穴があいているみたいだ、と。なぜ南極だけに穴があくかというのがまだ完全には説明されていないんです。もっとほかの場でもあいていいと思うんですけども、南極が一番あいて、このごろ北極の上も少し穴があきかけている。なぜ極地だけあくのかというのも、みんなを納得させる説明がまだ不十分であるということがあります。

それから、二一世紀になったときに南極の氷が溶けて水面が上がるから、世界の多くの

国が海に没してしまうと非常に脅かしたわけです。それは南極を研究している学者がマイナス五〇度の氷が二〇kmある、それが全部溶けることはあり得ない、でも、いくら溶けるかもしれない、と。その温暖化によって海の水面が上がるということは、それは全く否定もできないけれども、たぶん氷が溶けるといふようなことではなくて、温度が上がるために海岸に生物の死骸がたまって、ますます〇〇がふえたりして、その結果〇・五度とか一度位上がると、量が多いですから、少し上がる。五〇センチも一メートルも上がるといふことはたぶんないだろう、と。そうになると、バングラデシュとかスリランカの一部とか、そういうところはかなり水浸しになるんです。

日本はどうかと言うと、たぶん大丈夫だ、と。ただし一番困るのは、台風の高い波を防ぐのに、今の海面の水位で建設省は計算して堤防をつくっているわけです。それが役に立たなくなるから、台風のときに、杉並までは来ないけれども、新宿ぐらゐまで来るだろうということをおっしゃいます。私、杉並に住んでいるものですから、心配するなと言われたのかどうかわかりませんが、いろいろ、ちょっと不思議な現象もないわけではありせん。

もっと大事なのは、太陽の黒点の影響というのが非常にありまして、グリニッジ天文台

で水位と相関関係があるということはずっとはかっております。それから、夏と冬で炭酸ガスの量がどうなるかというのは、ハワイの気象台で数十年のデータがあるのです。日本はこういうことをやり出すと、役に立たないんじゃないかとすぐやめさせるんですけれども、そうじゃなくて非常に大事なことがこれでよくわかるわけですが、夏と冬では、要するに植物がちゃんと繁茂するかしないかで炭酸ガスはつきめんに違うのですけれども、こういうふうには平均値がずっと上がっているということは確かです。だから、温暖化ということとは間違いないことであろうと思います。

そのためには、石炭・石油をなるべく燃やさないで、ほかに変えたらいい。しかしこれに絶対反対というのが、第一がサウジアラビアです。もっともっと石油を燃やしてくれと言っているわけです。

あと酸性雨の問題があるのですけれども、地球環境の問題を非常に論じたときに、日本国民はそういうことに耐えるかという説が一つあるのですが、今国民の生活程度を知るのにGNPというのを使っております。日本のGNPは一人当たり二万五千ドル、中国が四百ドル、アフリカその他には百ドルを切っている非常に貧しい国があるわけです。

ところがこのごろは、お金で換算するのはよくないから別の表現を使います。金持ちの

国はエネルギーをたくさん使いますね。エネルギーを一番たくさん使っているのはもちろんアメリカですけれどもね。どのくらいエネルギーを使っているかと言うと、日本は石油に直して約三・五㎏使っている。中国が〇・六㎏ちょっと切れます。南北格差が悪いっていうので、どんどん中国に援助して、中国のGNPが三倍になることを願っております。三倍になったらどうなるかと言うと、エネルギーの消費に直接結びつきますから、二二億㎏の石油を使うことになります。石油の年間の生産量というのは限りがあります。そうなるかどうかと言うと、石油の値段が上がります。十倍ぐらいになるのです。サウジアラビアは大喜びです。そうなると結局中国は買えないのです。どうするかと言うと、どんどん自分の国の石炭と褐炭を掘って燃やすわけです。それが全部酸性雨になって、日本中に降り注ぐということになります。

その例がチェコなんです。あれは生産量を上げるために、露店掘りの褐炭を掘ってどんどん燃やしているのです。それで非常にきつい酸性雨が降っております。そのために、世界で平均寿命が上がらない国はチェコだけだと言われているんです。それは、チェコで国際会議をやると、出るのいやだとみんな言うのですね。のどをやられるんですね。pHが1以下の雨がどんどん降るので、結核になったりひどい気管支炎を起こしてしまうのです。

だから、年寄りと赤ん坊はどんどん死んじゃうから、平均寿命が上がらない。人口増加がそれで妨げるからいいじゃないかと言う人もいるけれども、我々はそういうわけにはいかないですね。

したがって、開発途上国を援助することは極めて必要なことだけれども、そのはね返りに対して我々はじっと我慢することを、今から覚悟できるかという問題があります。非常にこれは難しいですねえ。

オゾン層の破壊が問題になっております。冷媒その他に使うフロンを使わないことによつて、今フロン11とかフロン12とか、いろいろ使っております。これをもうじきなくそうと言っているわけですね。できれば九五年ぐらいまでになくなればなおいいということを行っているわけですけれども、代替フロンというのはフロンの134Aというのに前から目をつけて、もう製造計画に入つて、今プラントをつくっております。これの欠点は、やっぱりフロンでありますから、完全に無害ではないことと、値段が約五倍ぐらいするんです。これは自動車のクーラーの冷媒が主な用途なんです。日本の化学工業会社が今一足早く着手したら、アメリカとイギリス、ドイツ、フランス、イタリアの外資系の化学工場会社が一齐に日本に工場をつくり出す計画をして、その価格で売り出すということ

を先月発表いたしました。

そうすると日本の化学工業会社は太刀打ちできませんから、全部つぶれちゃうのでちょっと困る、少し遠慮してもらえないかと言うと、日本でやたらに車をつくって、おれたちの国の自動車会社がみんなつぶれたんだから、今度はそのお返しだと言うのですね。生産過剰になると、日本は相当な化学工業会社もかなりきついと思います。しかも、せっかくつくっても紀元二〇二〇年までにはその代替フロンも全部禁止するということになっております。だから、これはいいと思っても、そういう難問題がたくさんあります。

それから、熱帯雨林を伐採するのはよくない。シベリアのツンドラの木も伐り倒して、ほとんど日本が買っている。インドネシア、マレーシアの木も日本がみんな、大体七割ぐらい買っているんですね。そしてそれをベニヤ板にしちゃうんです。何にするかと言うと、ベニアでコンクリートを打つときの枠にするんです。低開発・途上国は何回も使っているんですが、日本は大体二回半ぐらい使うと、コンクリートを打つ効率が悪くなるものですから、どんどん捨てちゃうんです。

それはいけないっていうんで、じゃあ輸入を抑えようという計画を立てたんです。そうしたら、インドネシアの政府が怒っちゃったんですよ。そういうことをされるとインドネ

シアの経済は破綻する、聞くところによるとある会社は進んでそれを買わないと言っているそうだから、その会社のインドネシア国内における工場の受注は政府は認めないと、インドネシアの通商産業省が日本の外務省を通じて申し入れてきたんです。その会社はそんなことをした覚えがないんで、寝耳に水で、至急偉い重役を派遣して、どうしたらいいんだろうかということを頼んでおります。ブラジル・サミットのときもマレーシアとインドネシアは森林保護には絶対反対、軍事力に訴えても反対すると言っているんだそうです。一時が万事、全部そうであります。

ついでにもう少ししゃべってしまいますと、私は最近まで詳しい数字は知らなかったんですけれども、開発途上国に先進国は援助しなければいけないと、ODA (Official Development Assistance) 政府開発援助を行うわけですが、日本に限らず、先進国はこれを二つの方法で援助をしているわけです。

一つは国際協力事業団 JICA と言っておりますがこれを通じて金を出している。

もう一つは海外経済協力基金、これは私もあまり聞いたことないので、千人ぐらいの職員のいるところで、OECE (Overseas Economic Cooperation Fund)。それで JICA は通常会計は日本の政府が全額持っております。それから、OECE のお金という

のは有償で、財政投融资の予算から出しているんです。両方でどのくらいになっておりましょうか。今一兆五千億円出しています。そのうちの四五%が一般会計であります。五五%がこのOECEを通じて、利息二%、三十年貸し付け、いわゆる円借款というもので貸し付けておる。この財源の主なもの郵便貯金の集めた金とか年金の基金とか、そういうものです。それを投資しますから、返ってこないと困るわけですよ。これは取り立てるわけです。

そうすると、日本の一般会計から投資するというのは限度がありませんで、これ以上はもうとてもできないから、OECE、利息も払わなければいけないけれども、やっぱりこっちに来るかということになって、日本はこういうことになっているんですが、日本以外の国は一般会計から無償で金を与えるというのが、アメリカでも九五%ぐらいでしょう。それから、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア、みんな八〇%です。だから、貸し付けというのは非常に少ないのです。

ところがアメリカは、ODAの政府開発援助というのは、八割か九割はイスラエルです。アメリカの国益優先です。次が、今はエジプトでしょうか。それから南米の特に友好国。それだけです。はっきりしているんですよ。自分の国益のためにやる。日本みたい

にばらまかないのです。日本はばらまくから、みんな欲しがって来るわけで。

ところが、援助しなければいけないんです。環境保護については日本も責任があるし、日本は先進国でございますから、そのためには、例えば中国—これを言うときとえらいことになるんですけども、工場をつくったときに、公害防止装置もつけて中国に全部提供するわけです。そして暫くたって工場の運転ぐあいを見に行きますと、公害防止装置だけ運転停止です。運転もやや難しいということもありますけれども、金がかかるからと、とめちゃうんです。全部垂れ流しをしている。公害防止の法律があることはあるんですけども、非常に緩いんです。非常にわずかな罰金で済んでいる。その罰金はどうしても取らなければいけない。中国の各地方政府の環境保護局の財源というのは、その罰金だけなんです。だから、垂れ流ししないと困るわけです。それがわかってるんですね。

中国はまだいい方です。それ以外の発展途上国で今一番問題なのは、やはり下水道と森林の保護なんです。例えばインドでどうなっているかと言いますと、川が非常に汚れているっていうので、日本は、例えば水道の水というのは規制がありまして、BODといって汚れぐあいの指標がございます。これが水道は1ppm以下ということになっております。汚い川でも10ppm以下となっております。

インドはきれいな川で五〇〇ppm、汚いのは一〇〇〇ppmです。

だから、それをどうしたらいいか。いろんなところから出てくるのをなくさなければいけない。どんどんお金を使って今やっているのは、公衆トイレをつくって少しでも垂れ流しを少なくしようというんですが、公衆トイレというのは、簡単なトイレでもやっぱり金がかかるんで、それを何万個とつくるのは相当な金になる。

それから、日本の産業の中で世界に冠たるものが幾つかあるんですけども、一番優れているのは何かと言うと、瞬間燃焼の火葬炉なんです。これは世界に冠たるものです。火葬をしているという仏教国はみんな欲しがっているんですけども、高いから買えないわけです。終戦直後ぐらい、秋田で私の父が死んだときは、薪で燃やすわけですから、一晩ぐらいかかりました。今は一時間かからないんじゃないですか。あの電気炉ですね。それで全く無公害ですよ。だから、まずそういうものをつけて。しかしインドでは金持ちらは完全に灰になるまで焼く。そしてガンジス河でも放り投げるから、これは心配要らないけれども、貧しい人は薪がないわけです。だから、一割ぐらい焼けたところでぽんと投げるんで、これがBODの大きい原因になっている。それをどうしたらいいだろうか。

そうすると、地球環境問題については、宗教というのはまだ出番がないと思うんですけ

れども、ところが、各国で宗教活動をしている人がみんな地球環境問題を取り上げたのは一体なぜだろうかというのは、まだ私もよくわかっておりません。公害問題ならわかるんですけれども。地球環境というのは、このようにだいたい南北格差でけんかしている真っ最中ですからね。温暖化を防ぐのに石炭・石油を燃やさないようにしようとか、森林をあまり伐らないようにしようとか、クリーン燃料を燃やして酸性雨を少なくしようとか、それは先進国です。世界の五十五億のうち、八億の人がそういうことを言っている。残りの四十数億の人はみんな反対しているっていうんですね。その現状を、一体どういうふう到我々はこれから考えていかなければいけないか。

その根本には、人間はもともと自制心のない動物だということ。これはお釈迦さんがご在世のときからそれを言うておられる。そのために自制をするようにしろと言って、少欲知足ということを教えられました。これは個人の守るべき規範としては非常にいいけれども、なかなか守れないんですよ。そのために、きつい修行をして、自然に少欲知足を守るようにしたわけです。

ところが、個人の倫理と集団のモラルと違います。集団のモラルはもっと別の考えでやらなければいけない。これは前から社会学者が言っていることです。例えば車がふえて交

通問題が起こったときにどうしたらいいかと言うと、いろんな交通法規をつくるんですね。他人に優しく、思いやりの心で運転しましょうと言っても、交通事故は減らないんですよ。やむを得ないからどうするかと言うと、こういう運転をしたら逮捕して監獄に放り込むということを国家権力で集団規制しないと、交通問題はなくなりません。悲しいことだけれども、それが現実の問題です。

だから、今どうなっているか知りませんが、十何年前にシンガポールに講義に行って、その後二度目か三度目に行ったときに、ごみを捨てるな、罰金を五百ドル取るというのでみんな捨てるのをやめた。どうしてそれが徹底するか、おまわりさんはそうたくさんいるわけじゃないかと思ったら、捨てたのを見つけた人は申し出て、証人がいればその罰金の半分はくれるんですよ。だから、みんなウの目タカの目で、だれか捨てないかと。だから、一人うっかり間違えてぽつと捨てると、五、六人わっと、おれが見つけたとやるんだそうです。今それ、どうなってるんですかね。

だから、社会主義の国家が集団モラルを保つことができなかったのも、密告を大いに奨励したわけです。自分のお父さんはこういう違反をしたと訴えたんで、それはレーニン勲章かなんかもらったんですか。お父さんは終身懲役になっている。もう、考えられないで

すね。そういうことが現実に行われたわけです。そんなことしなきゃいけないのかどうかという問題ですね。

そうすると、少欲知足というのは、坊さんは一人一人がそうなんです、集団となったときにあらゆる教団は少欲知足かと言うと、これは仏教に限らずイスラム教もキリスト教も新興宗教も、みんな大欲飽くことを知らずだと私は思います。

それをどうしようようにしたらいいかと言うと、仏教にこれを求めるとすると、私たちは因縁所生ということを知りました。因縁によってつくられ、因縁によって滅びる。

インドに四劫の説というのがあって、この宇宙は四つの時期を経て入れかわり立ちかわるのだ、その長さは劫と言ってむちゃくちゃ長い、本当は無量大に近い長さです。百年に一遍天から鳥が降りて、石を羽でこすって、それが擦り減るまでを劫と言うとか、無量大に近い長い時間です。

最初は成劫という時代で、器の世間と衆生世間、つまりこの地球上の万物ができ、衆生世間、人間社会ができる。そしていろいろな変転があって、その後住劫というのはそれが安穩に続く。それが終わると壊れ出す。それが壊劫。劫火滔蓮としてこの地上は滅びる。

空襲でやられたときに、劫火洞然という感じがいたしました。私は三月十日の空襲のと

きは東京にいないで、ちょうど松戸の工兵学校におったんですけれども、びっくりしましたね。炎々と燃えているんですね。ああ、ああいうものかと思いました。その年の八月は、ご存じでしょうけれども、隅田川がとてもきれいな水で、白魚が泳いでおりました。だから、隅田川を清くしようとえば、五、六遍大空襲に遭えばきれいになりますけれども、それは願わしいことではもちろんないわけでありませう。

だから、そういうのできたものはいずれ滅びる。そうするとその後、空劫と言って何にもない時代が続いてくるんです。そして一陣の風が吹いて、またこの器世間、地上世間ができる。これは仏教じゃなくてインドの思想ですね。仏教はこれを取り入れております。これをもとにして『俱舍論』なんかができておるわけですから、世間品なんかは引用されているんじゃないかと思えます。昔ちょっと読んだだけで、もう忘れてしまいましたけれども。だから、こういうのを少し探しても、地球環境問題にはお役に立つようなものが出てこないんですね。

本当に仏教徒、特に大乘仏教徒というのは非常に寛容で、そこが攻撃される点でもあるんですね。だから、いろんなキリスト教とかユニテリアの会員なんか、ちょっとお手伝いしたことがあったんですけれども、アメリカにいる日本人の二世、三世、四世ぐらいの

クリスチャンの日本人が、キリスト教徒で、しかも神社にお参りしたりお寺に頭下げるのはわからないと言われました。非常に原始的で、おかしいというんですね。シンクレティズムの問題はそこだと言われました。

それから、今の環境問題を話しているときに、私たちは動物はもちろん植物も生命から言えば同じだということを使うけれども、キリスト教社会の人はイエスとは言いません。パーティーになると、おまえの言うことはよくわかる、と。キリスト教社会では、公の場で人間とほかの生物が同じということは、言っちゃいけないんです。これは大変なタブーですね。だから非常に困るといふのは、今度京大おやめになったけれども、河合先生が、国際会議のときにそれが一番困ると言っていました。

私たちが大いにその点は誇りに思って、そういうことができたんだから、集団とか国家に対しても、もう少しいろいろなところで自制をしなければいけないということを私たちは説かなければいけないんじゃないだろうか、こう考える次第でございます。

あとがき

本集は、浄土宗総合研究所布教研究部の平成四年度の定例研究会の講演をまとめたものである。

テーマを「環境問題への視座」としたのは、私たち仏教徒、浄土宗教師が環境問題を取り上げるにあたって、いかに立ち向かうのかという視座の構築が求められていると思われるからである。

環境問題は現代社会における問題の中で、もっとも注目を集め、かつ国を越えて未来の人類にかかわる重大な問題である。それは優れて政治的、経済的、社会的、倫理的な問題であるといえる。

そして近年、各国ごとでの解決を越えて地球規模での問題が深刻化してきた。主要な問題群をあげれば、①地球の温暖化 ②熱帯林の減少 ③酸性雨 ④オゾン層の破壊 ⑤有害物質の越境移動 ⑥海洋汚染 ⑦砂漠化 ⑧途上国の環境問題などである。

各国ごとでの公害問題に端を發した環境への関心も、問題が地球規模になることによって、むしろその解決が、各国の行政や企業倫理の問題だけではなくたことを示してい

るといえよう。問題が拡大し大きくなった分、その解決は全体におよび、私たち一人一人の心の問題にまでおよんでいることを確認するに至ったことが、今回のテーマ選定となったのである。

単に社会問題として環境問題を取り上げるのではなく、宗教者として「環境」とは何かという根源的な問いかけ、理念的な問いかけを行うことによって、宗教の問題として据え直し、仏教の自然観から問い直してみたいと考えて、この問題を取り上げたのである。

第一回は、平成四年七月二十日に環境監査研究会幹事の酒井嘉昭先生に「環境問題とは何か」のタイトルのもとに、環境問題の概念枠についてのご講演をいただいた。

第二回は、同年九月二十八日に大正大学教授・東京、阿弥陀寺住職の松濤誠達先生にインド、原始仏教研究者の対場から「環境としての自然——初期仏教の場合——」のご講演をいただいた。

第三回は、同年十月十九日に筑波大学教授・山梨西涼寺住職の奈良博順先生に日本人にとっての自然をテーマにして、「日本文化と自然」のご講演をいただき、合わせて椎尾弁匡師の『共生運動』についてもお話頂いた。

第四回は、同年十一月九日に埼玉工業大学前学長の武藤義一先生（曹洞宗所属）に、

「地球環境と宗教」のご講演をいただいた。

環境問題への視座

布教資料 第7集

平成5年3月31日

編集・発行 浄土宗総合研究所
〒105 東京都港区芝公園4-7-4
明照会館内 TEL 03-5472-6571
FAX 03-3438-4033

印刷 ヨシダ印刷株式会社

